
no name (未定)

ささくささく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

no name (未定)

【Nコード】

N7274T

【作者名】

やちくやちく

【あらすじ】

古来からの風習が色濃く残る場所、生贄の少年と臆病な少女が出逢った物語。(掲示板に書いててサイトにも載せていました)

終わりの村

古い言語で「終わりの・行き止まりの」という名前の村がありました。その村にはずっと昔から「終わり」があつたからです。

「終わり」は大きな岩の裂目でした。

その世界はちつぽけだったので歩いても半年あれば充分一周できてしまいました。もちろん海もあれば山もあります、大きな滝も深い森もあります。しかし世界の裂目は「終わりの村」にあるきりでした。

「終わりの村」は暮しやすい村でした。

一年中暖かく、柔らかい草が一面に生えていて子供達は裸足で走りまわって遊べました。

小さな村ですので村人は皆顔見知りでも平和でした。

ゆっくり歳をとって、そして灰になるまで。

疑問はありませんでした。深く思考する必要性もなく、日々は穏やかに過ぎていきました。

たまに裂目を見に来る旅人が訪れます。ある者は世界の亀裂に興奮し良い土産話が出来たと喜び、またある者は見に行つたきり戻ってきませんでした。

小さな少女はそんな世界の「終わりの村」で生まれました。

村人の半数がそうであるように彼女は白い肌に金色の髪を持っていました。ただ彼女の髪は誰よりもきらきらと陽に映える素晴らしいもので皆それを褒め称えました。

彼女の名前はリノ。古い言語では「天使」という意味でした。

ある日終わりの村に移動サーカスが着ました。

娯楽や変化に乏しい村ですので村人達、特に子供達はとても喜びサーカスの馬車にかけよりました。

リノも近くで見たいと思いましたが、彼女は少し引つ込み思案でしたし知らない者への恐怖もありましたのでこっそりと様子を伺っていました。

サーカスの馬車は先頭に団長の乗る素晴らしい造りの車があり、その後ろには団員が乗る少し質素なものが繋がっていました。その後は衣装や道具の荷馬車、その後ろが動物達の檻のようでした。

大人達は団員達と公演の話をしていますし、子供達は檻の中にいる珍しい動物に夢中です。

リノも動物の檻を覗いて見ましたが、他の子達を押しつけて近づける程リノは気が強くありませんでした。

ふと、動物達の檻の後ろにもいくつか布の被さった小さな檻がある事に気が付きました。

この中にも動物がいるのだろうかと思いついて近づいてみましたが、鳴き声など聞こえません。

だからか子供達もその檻の周りにはおりませんでした。

これも道具入れなのかと考えた時、檻の中からチリンと小さな鈴の音が聞こえました。

…ネコ？でもそれにしては檻が大きい。

トラやライオンは入りそうにありませんがネコを入れるには大きな檻です。

リノはそつと分厚い布に手をかけました。
下の方には風で捲れないようにか重しがついてある布です。

気の小さいリノはそつとそつと、本当に少しだけ布を捲ってみました。

すると中でもう一度チリンと鈴の音がしました。

中にいる何かが身じろぎをするような気配が伝わってきました。

リノは恐くなって布から手を放しゆっくり後退りました。

…人が 人が中に居る

布を捲くって見た訳ではありませんが、リノは昔から勘の強い子供でした。

…この檻の中に人が居る。身体を縮こまらせて息を潜めて…

断言はできませんがリノはそう確信しました。

チリン

また鈴の音がしました。

「お嬢ちゃん、まだ準備ができていないから勝手に見てはいけないよ」

突然後ろから少し強い調子で声をかけられ、リノは酷く驚いてふりかえり檻から離れました。

声をかけてきたのはサーカスの団員らしい中年のがっしりした体型

の男でした。

気の小さいリノは咎められた事が恐ろしくて、震えながら俯いて謝ると急いでその場を離れました。

家まで走って帰る時も咎められた事が恐くてなりませんでした。

リノは叱られる事に弱い子供でした。

元々大人の言う事をよく聞く良い子でしたから滅多に叱られないのですが、少しでも強い口調で責められると恐ろしくてならなかったのです。

特に両親意外の大人から叱られると自分がとんでもなく悪い子なのだという気持ちになって、何かとりかえしがつかない大変な事をしました。たような気持ちになって。

何日も何日も胸の中が重くなってしまふのでした。

だから今日も言われた事がなかなか耳から離れてはくれませんでした。

そんな強く咎められた訳ではないのに、リノはそんなに悪い事をしていた訳でもないのに。

リノはそういう子供でした。

ところで

それは丁度13年程前、ちっぽけな世界の中でもとりわけちっぽけなある村でおこなわれました。

「神様へお伺いをたてる儀式」

村で一番の年寄りが村の真ん中にある岩の上に昇り

「神様 神様 私達がもつと豊かに、もつと幸福に暮せるようにするにはどうしたらよいのでしょうか？」

「神様 神様 どうぞ私達に天災をあたえないでください、牛や豚や野菜を沢山お与えください」

大体そんなような事を一年に一回お祈りして神様からの言葉をいただくのです。

神様は村で一番の年寄りに乗移り

「今年は豊作だ」とか

「山の近くに社を建てるが良い」とかおっしゃいました。

が その年は違いました。

「これから産まれて来る赤子がこの岩と同じ背丈になったら『おわり』に放り込め。さもないと村は大変な事になるだろう」

そう、恐ろしい声で年寄りに乗移った神様はおっしゃいました。

丁度その儀式の翌日男の子が産まれました。

その子は古い言葉で「おわり」という意味の『フォー』と名付けられました。

フォーは賢い子供でした。

だから村の中で自分が異質であるという事に小さな頃から気がついてしまっていました。

フォーに両親はいません。

フォーが産まれた日長老から神のお告げを聞かされ、まだ赤子のフォーを抱いて逃げたのです。

そして村人に捕まり両親は亡くなりました。

亡くなった

いいえ 殺されました。

村人は誰もそんな事フォーには言いませんがそんな事は小さな頃から理解っていました。

二親のいないフォーを育ててくれたのはリストムという老賢人でした。

村人達は「災い」であるフォーを育てる事を恐れ村外れに住む変わり者に押付けたのです。

妻も子供も無く、長年書物に埋もれて生活していたリストムはフォーを可愛がりました。

村人や村の子供達は表立ってフォーを苛めたりはしません。

人は恐ろしいものや正体がわからないものには距離をおきます。

関わりをもってしまう事が恐いのです。

それはもしかしたら、迫害や苛めや差別よりもずっとずっと酷い事なのかもしれません。

フォーが近づくと村人は何気無さを装ってその場を離れます。

子供達も遊ぶのを止め走り去ります。

だからフォーは自分は自分の姿が村人と変わり無いと思っていたけれど、もしかしたらみんなにはフォーの事が鬼や化け物みたいに見えるのではないかと何度もリストムに訊ねました。

けれどリストムはそんな事はないというばかりでした。

実際、フォーはとても綺麗な姿形をしていました。

肩程に伸ばしたままの亜麻色の髪は細く真っ直ぐで白い民族服から伸びる手足は形良く、顔は少女じみた風貌でしたが大きく深い翠の瞳が彼の賢さをありありと物語っておりました。

「お前が鬼や化け物に見えるなんて言う者がいたらそやつが鬼や化け物の目を持っているんだらうよ」

そう 悲しい表情でリストムはフォーに言聞かせました。

…もしかしたら、この愛らしい容姿も

村人達があそこまでフォーを忌み嫌う原因の一つかもしれない。

『可愛らしい姿に騙されてはいけない、とんでもない災いを運んでくる悪魔の子』

そう村人達が囁いているのがリストムには聞こえてくるようでした。

フォーが13になった年リストムは病に倒れました。

そう苦しむ事も無く、ほんとうにあっけなく、彼は亡くなりました。リストムの亡骸を埋めながら泣く事もせずフォーは世界が消えて無くなってしまえばいいと思いました。

それからフォーは1人になりました。

村人はフォーが死んでしまうと困るので食事だけは毎日置いていきました。相変わらず気味悪そにフォーを見ていました。

フォーはもう理由を知っていました。

リストムがすべて語って逝ったのです。

神のお告げがあった事

村の中心にある岩にフォーの背丈が届いた時「おわり」に行かねばならぬ事

フォーはその事を聞いた後も不思議と悲しくはありませんでした。

自分を可愛がつてくれたリストムはもういません。

大事なものなんてありません。

この世界には未練がなかったのです。

今すぐにもリストムのいるところに行きたかったです。村人達はそれを許さないでしょう。

だからフォーは待ちました。

誰も話し掛けてはくれない世界で

誰も笑い掛けてはくれない場所で

リストムの残した大量の書物を読みながら終わりを待っていました。村にある学校には通っていませんでしたがリストムがあらゆる事を教えたので

フォーは村の子供よりも知識が格段に豊富でした。

けれどフォーは考えました。

…でも、この行為には何の意味をないんだらうな

だって自分は大人になる前に死ぬのだから

リストムが亡くなって少しすると村人は急に不安を覚えました。

…もし突然フォーが、災いの子供が逃げ出したりしたら

もし突然病で死んでしまったりしたら

村人達にとって、フォーの存在は自分達のすべてを左右するものだったので、本当は「その時」が来るまで箱にでも閉じ込めておきたいぐらいでしたが自分達のすぐ近くに置くのも恐ろしかったので、フォーが生きている事を確かめる手段を考えました。

一日二度の食事は家の前に置いていきますので毎日顔を確かめている訳ではありません。それにフォーはあまり村の方に来たりしません。突然顔を出されると心臓に悪いと年寄り連中が嘆くので常に居場所を知っておきたかったです。

数日後、村長がフォーを尋ねてきました。

「これをつけていなさい」

そう 端的に告げると村長は足早に帰っていきました。

フォーはぼんやりと村長の持ってきたモノを見つめました。

小さな鈴がいくつも結び付けられている細い紐が4本。

…4本、という事は手足なんだろうな。

のろのろと紐を手にとりフォーは考えました。

…5本じゃなくて良かった、首にまでつけさせられたら自分はまるで…

そんな事を考えながらフォーはもういないリストムの姿を探しました。

慰めてくれる唯一の人間を探しました。

狭い家の中、どこにもその人がいない事を理解っていながら視線はいつまでも優しくかった人を探していました。

それからフォーが動くたびにチリン チリンと鈴が鳴りました。村の外れに一日中一人でいるフォーはあまり物音をたてない静かな少年だったので、動く度にする鈴の音はひどく耳に障りました。もうリストムもいないので喋る事をしません。

チリン チリン

鈴だけが静かな村外れに響きました。

終わりの村（後書き）

修正しながら更新します。

誤字脱字等つながりが奇妙しい箇所があったら「一言」とかで指摘していただけたらうれしいです。

終わりの始まり

おわりの村はサーカスの一団を迎えて浮かれたっています。いくつか屋台もできました。

馬車の近くでサーカスの団員達も公演の前に少しだけ芸を見せてくれたので、子供達は大はしゃぎです。

リノはまだ自責から完全には立ち直れずにいましたがやはりそこは子供ですので、楽しい音楽や笑い声のする村の中央広場に出かけていきました。

中央広場の端にはサーカスの馬車が止めてあります。

普通でしたらリノはあんな注意をされてしまったら、絶対に馬車には近づこうとせず、苦しさを忘れるよう前後の記憶を思い出さないよう努力しましたが、なぜだか鈴の事が頭から離れずにいました。

賑やかな広場をサーカスの団員達の芸をそつと見つつかつかなびつくり歩いていると中央の方で少し人に気配が変わりました。

何か新しい事が始まる様子です。

リノは人々の隙間から何があるか覗きました。すると顔なじみのおじさんがリノを手招きし中央の前方に回り込ませてくれました。

人々の中心にはサーカスの団員と見慣れない服の子供がいました。

その子はとても 綺麗な容姿をしていました。

一枚の布をワンピースのように仕立てた民族衣装
風にさらさらと散る亜麻色の髪
大きな翠の瞳

リノは最初、なんて綺麗な少女だろうと思いました。

けれどその子の表情を見ると少女のそれとは少し違う気がしてきました。

その子はとても愛らしく優しくでしたがどこか少年の鋭さを感じさせました。

サーカスの団員の1人がその子を真ん中に立たせ何やら囁き
周りの村人に「静かに 静かに」と注意をしました。

静かになるとその子はゆっくり息を吸い視線をどこか遠くに投げ
けれどその子が何も見ていない事が何故かリノにはわかるのでした。

突然 空気が震えました。
ぞくぞく

と リノの背筋に緊張がはしりました。

その子が声を発した途端 空気が変わりました。
広場に出すにはか細い声です。

けれど

絶対的な、圧倒的な、なにかがその声にはあるのです。

感受性の強い人間だったら反射的にその声に服従してしまいそうになる

言霊の響き

それは意識ではなく理論ではなく思考ではなく
産まれてくる前から魂にすりこまれていた記憶の領域

恐ろしさよりももっと単純な事

命令よりももっと簡単な事

その言葉に逆らう事など考えられない、
逆らうなんてありえない。

そんな類の力に支配されてリノは身体が硬直し
瞳をそのことからそらす事すらできなくなってしまう。

そんな恐ろしい程の影響をリノに与えながらも
か細い 小さな声はだんだんと旋律を伴って響きます。

それは静かな歌でした。

けれどそれは、苦しいくらい悲しい歌でした。

リノには歌詞の内容がわかりません。

どこか遠い国の、古い言葉で伝わる民謡のような歌です。

もしかしたら歌詞じたいは悲しいモノではないのかもしれませんが、
それは悲しい歌でした。

その子の声は恐いくらい澄んでいて、触れると壊れそうな硝子みた
いに透明でした。

小さな声でしたが、だんだんと高音に昇っていつてもまったく擦れ
ることがなく、人間の声域で出し得るとはとも思えない神の領域
だと思っていた高音にもその声は昇りつめます。

リノは身じろぎもせず声も出せずただただ 自分の意志とは無関係に流れおちる涙ごしに
その子を見つめていました。

儂く、悲しい程綺麗なその声が風に消えるように途切れました。

拍手はありません。

みんなはリノのように涙を流してはいませんでした。何かによればたように静まりかえっていました。

そしてそのこを見るみんなの目は未知のものに触れた時のように怯えていました。

いつからだったか定かではありませんが、フォーはあまり声を出さなくなりました。

育ての親のリストムが死ぬ少し前くらいだと思います。

リストム以外話す相手がいないのですから
あたり前なのですが、その事をリストムはととても心配していました。

「フォー、私はきつとそう長くない。どうかおまえの声をもつと聞かせておくれ、わたしが死の国へ行ってもおまえの声を忘れないでいられるように」

そう 寝床に横たわりながらも語りかけますが、フォーは絶望にと
らわれていて上手く返事ができません。

「うん…何を話したらいい？」

ようやくそれだけ返事をしました。

「ああ では今日、外はどうだい？空は晴れているかい？わたしら
の小さな畑は順調なのかな？よく一緒に餌をやっていた鳥は今でも
元気だろうか？」

リストムは本当は喋るのも苦しくてしかたがないのですが、フォー
に答えてもらいたくて、フォーの笑顔を少しでも見たくて、とぎれ
とぎれながらも そう 質問しました。

フォーはぎこちなく微笑むとそれをひとつひとつ答えていきます。

そんな日が何日か過ぎましたが、死期の迫ったリストムの質問はし
だい言葉をなさくなりました。

それでも何かフォーに伝えようとするリストムは咳と共に血を吐き
はじめました。

「もういい もういいからお願い それ以上喋らないで！」

フォーが泣きながらリストムを止めましたがリストムは質問をやめ
ません。

それはもはや声ではなく喉をヒューヒューと鳴らしているだけでし
かありませんでした。

「わかったから お願い、わかったから……」

リストムの手をとり少しでも温もりを記憶しようと、フォーは顔を埋めます。皺の深いリストムの手は骨ばっていて肉はまったく言っていないほどついていませんが、大きく優しい手でした。

…どうすればいいのだろうか？

…どうすればこの優しい人に安心させてあげられるのだろうか？

自分もつと色々な話をしてリストムに語りかけてあげられれば…。でもフォーはほぼ一日中つきっきりで看病しているので新しい話などあるはずがありません。それにフォーはいつだってリストムに新しい事を教えてもらっていたので何か教えてあげられる事なんてないように思われました。

…自分はなんて無力なんだろう

フォーは大切な一人の人間の事すら何の力にもなれない自分が悔しくて悔しくて切なくてただただ声もあげず涙する事しかできませんでした。

リストムの熱が高くなり、フォーは頻繁に小川に水を汲みに行きま

した。
フォー達の住んでいる小屋と村人達の集落の丁度中間地点に流れている浅く澄んだ小川にはよく村の子供達が遊んでいました。フォーと同じくらいの年の子供はフォーを見るとさっと居なくなってしまうが、まだ小さな子供達はよく不思議そうにフォーを見つめてきました。

昔から、フォーは子供に触れてみたいと思っていました。
それも小さな小さな赤ん坊を。

抱いてみたいなんてそんな夢のようは事ではなく、あの柔らかそうな生物をそつと触ってみたかったです。

もちろん、そんな事は叶いませんでした。

村の人間は誰一人、なんだかわからない恐ろしい贅の子供に大事な赤ん坊を触らせようとはしなかったからです。

その日もフォーは水を汲みに小川にきていました。

するとそこにはまだ若い、娘といっても差し支えないような母親が赤ん坊を抱いて座っていました。

子守歌でしょうか、赤ん坊にやさしいやさしい視線を向け語りかけるようにささやくように小さな声で歌を歌っていました。

フォーはその光景をそつと、そつと見ていました。

目の前にある幸せを自分はどう足掻いても手にいれる事はできないのです。

望む事すら できないのです。

フォーとその母子は5mと離れてはいませんでしたが眩しさと、何故か溢れる涙でフォーには霞んでしかその姿をみる事ができませんでした。

その母子に気付かれないようにフォーは少し離れた場所で水を汲んでから小屋に帰りました。

まだ耳の奥ではあの母親の歌っていたやさしい歌が残っています。

すべての災いからこの子をおまもりください

あたたかな光をとどけてください

飢えることのないように

傷つくことのないように

悲しむことのないように

どうぞこの子に幸いを

偉大なるあなたのご加護を

…恐らく神に我が子の祝福を願う歌なのだろう

リストムはこの歌を小さい頃フォーに歌うことはありませんでした。「神」への祝福の歌をフォーに聞かせるのは酷だと考えての事だったのでしょうか。

そんな事をぼんやりと考えながらリストムの待つ小屋へと帰りました。

小屋に帰り リストムの額にのせてある濡れた布を新しく取り替え、枕元に座るとフォー突然

「歌を歌ってもいい？」

と切り出しました。

リストムは病床の身体も忘れびくりとフォーを見上げました。そして擦れる声で

「フォー？おまえは歌をしっているのかい？」

と不思議そうに訊ねました。

リストムはフォーに歌らしい歌を教えた事がなかったのです。

この村に伝わっている歌は大抵が「神」への祝辞でしたし、リストム自身古い言語や歴史などについての知識は豊富でしたが童謡や御伽噺の類を多くは知らなかったのです。

今更ながら、子供のフォーにはつまらないだろと思われる村の大人すら読まない本などをよく読み聞かせていたものです。

「うん さつきちよつとだけ聞いたから覚えたんだけど…その、歌詞は忘れちゃったからつけられないけど…」

フォーは俯きながら答えました。

本当は歌詞もすべて覚えていました。

フォーは物覚えが素晴らしく良い子供だったので、本でも一回読んでもらえば大抵内容を暗唱できたのです。

リストムはフォーの頭の良さを知っていたので歌詞を忘れたというのは嘘だとすぐにわかりましたが、少し目を細め

「ああ じゃあ曲調だけでいいから歌っておくれ」

と促しました。

リストムが久しぶりに嬉しそうにしているのを見てフォーも久しぶりに微笑ました。

そして耳の悪いリストムにも聞きやすいように枕元にかがむとそつと 囁くように先刻の母親が赤ん坊に歌っていたように、自身のだしえるすべての愛情を注ぐようにゆっくり歌いだしました。

優しい調べはフォーのまだ透明な声に良く合いました。

歌詞をつけていないので素朴さが際立って響きます。

観客は死期の近い老人が一人

舞台はなく、枕元で響く至上の歌声

その寂しく静かな小屋で、世界から切り離されたように寄り添う二

人は『自分は今世界で一番幸せである』と確信していました。

それはリストムが息をひきとる数日前の事です。

その頃にはもう痛覚が麻痺しているのか苦しむ事もなく、表情も穏やかでした。

リストムもフォーもその体調の安定が回復であるとは考えてはいませんでした。

けれども二人はほんとうに僅かなその穏やかな時を微笑受け入れました。

「フォー、最後に少しだけ長い話をしてもいいかね？」

「うん、なあに？」

「今から話す話をこの年寄りがもうろくした妄想の話だと思ってくれてもかまわないんだ。

いいや、私ももしかしたら妄想かもしれないと近頃は思ってきたんだが…。」

「…不思議な話なの？」

「この世界の常識からすればな」

そう悪戯っぽく笑うとリストムは少し水を飲み唇を湿らせました。

そしてゆっくり息を吐くところ切り出しました。

「では、世界の終わりの話をしよう」

終わりの始まり（後書き）

酒の勢いで書いていたのでかなり辻褄が合っていない。
でも直すと勢いがなくなりそうなのでそのまま投稿。

リストムの長い話

「世界の終わりの話」

それはささやかに けれど確実に迫ってきていた

沢山の拍手が響く

時間をかけてゆっくりと腐ってきた世界は
終わりの始まりを待っていた

拍手の音は銃の音

悲鳴なんて無意味すぎて 誰も聞いてやしないんだ

「私がこの村に来る前、このちっぽけな世界を旅していた事は話しただろうか？あれは何十年前の事だったろうか…」

私達の世界はとてもちっぽけで、ぐるりと海に囲まれていて、その海を舟でずつと行くとまた元の場所に戻ってくる。

世界の隅っこにある岩山の真ん中には「終わり」がある。

まるで箱庭のような世界

「私は常々この事に疑問をもっていたんだよ」

ちっぽけなこの世界よりもっとちっぽけな私はあてもなくあちこちを巡っていた。

目的があつたワケじゃない、ただ私には家族というものがなかったからひとところに留まっている理由がなかったんだよ。

「家族は…死んじゃつたの？」

ああ でも死に別れた時私は十分一人で生きていける歳だつたしあちこち巡つた村々に友人も出来たから寂しくはなかった。

こんなちっぽけな世界だが、驚きや発見に溢れていたよ。

高い山にも登つたし 大きな船で海にも出た、深い森で恐怖を覚え
美しい滝に魅入られた

そして「終わり」も見てきたよ

「終わり」は恐ろしく深い穴だった
いや穴ではないのかもしれない
あれは闇だったのかもしれない

ああ 本当はおまえにこんな話を聞かせたくはなかったが、おまえはその愛らしい見かけからは想像もつかないほど強靱な精神と激しいほどの強さを秘めているから。
私はすべてを話そうと思う

私は神よりおまえを信じているから

「終わり」の近くには小さな村があった。みんなその村の事を「終わりの村」と呼んでいたよ。
穏やかな、いい村だった。

あちこち巡ってきたが私が一番長く滞在したのもこの村だった。この村の人々は皆白い肌に金色の髪をしていてな、昔読んだ歴史書に描かれていた天使様を思わせたよ。
流星は「終わりの村」の住民だとな。
しかもな 私はその村で本物の天使を見つけたんだ

「本物の天使？」

ああ それはもう例え様もなく美しい娘だった。
若かった私はどうしても彼女と結ばれたくて、今思うと恥かしいく

らい必死になつたものだよ。

「天使：みたいに綺麗な人だったの？」

：いいや 「みたいに」ではなく「天使」だったんだ

今私達が暮している村は神への信仰が強いし「終わりの村」も神を崇拜していた。

けれども、私はその頃「神」というものをさほど信じてはいなかったんだ。

私はあちこち旅をしていたし、私の両親もあまり信心深い性質ではなかったからな。

だがな、私はその娘に会って初めて神に感謝したよ。

：もちろん神が実際に居ようが居まいが関係なく、ただただ「なんだかよくわからないけれど誰にでもいいから礼をいいたい」という気分になつただけの話だがね。

彼女は3年ほど前から村に一人で住んでいるらしい。

家族はなく、村長の家で奉公などをして生活していた。

家族が何故いないのか？

この村に来る前はどこに居たのか？
年はいくつなのか？

何を聞いても彼女は微笑むだけで何も教えてはくれなかった。

彼女は普通17・8の娘に見えたが、フトした表情は60の老婆のようにも見えた。

私にはそのどちらの顔も美しく神聖なものに思えたよ。

私達はとても親しくなったが、彼女はいつも一線をひいた態度を崩さなかった。

「…悲しい？」

ああ 悲しかったよ、とてもとても とても…

…フォー、大丈夫だからそんな顔しないでくれ、もうこの話は古い。

とうに傷を癒えているから。

そう、私はとても悲しかったが私が悲しいというだけで彼女を苦しめる事はしなくなかった。

だから私は彼女に村を去る事を告げた

そして「終わり」に向ったんだ

「どっして…？」

………
わかるだろう？フオー

ヒトは弱い弱い弱い生物なんだよ。とくに私は 弱くて弱くて弱く
て弱くて弱くて…

そして最大級に愚かだった。

「死のうと…？」

ああ

「おわり」には柵なんて無粋なものは無くてな、何者も拒まぬ深い
闇がぽっかり口を開いているんだ。

小さな湖位のおおきさの闇

底なんて見えない

石を落としても音がしない

「おわり」の闇

私は世界で一番自分が不幸だと考えていたよ。

愛する者に愛してはもらえなかった自分はなんて可哀想なんだとね。

…そんな風に考えてしまう人間なんて死んでしまえば良かったん。

私はその時の自分を憐れんでいるよ。

「憐れむ」というのは傲慢で尊い感情だ。

一步、また一步と「終わり」に踏み出し、それでも踏み込めずにいる

なんて情けない

なんて滑稽

なんて憐れ

そんな風にして、私は何日も「終わり」に居たんだ。

踏ん切りがつかないまま旅用の保存食を齧り「終わり」の近くで寝止まりし

覗き込んで離れ、離れては覗き込みしなからな。

そうしてそれは丁度満月の夜だった。

どうしてか知らないが月というのはヒトの身体になんらかの影響を与えているみたいでな、私はその日満月を仰ぎ見て決心したんだよ

飛び込もうと

満月の神々しい光の下では「終わり」の間も少しだけ恐ろしくはない気がした。

一步一步進み 穴の縁に足をかけても私は後戻りを考えなかった。

満月はヒトを狂わせる

恐ろしいと思わない人間ほど恐ろしい生物はないと思うよ。

心がしんとして闇が心地よく感じた私は迷いなく足を踏み出した。

けれども

踏み降ろすことが 出来なかつたんだよ

私はその時彼女の声を聞いたんだ。

彼女の悲しんでいるような喜んでいるような泣いているような笑っているような

叫び声みたいな声を

私はあわてて辺りを見回した。

真夜中だったが満月の光でそう暗いわけじゃない、私の斜め後ろ辺りに彼女は白い服を着て立っていた。

「どうして？なんでその人は「終わり」に？」

フォー、「終わり」に来るものは観光でなかったら答えは一つなんだよ

「…どうして？」

ああ 彼女はな不治の病に冒されていたんだ
私もその時になって初めて聞かされたよ
だから彼女は…

…彼女の声は別れた時より酷くひしゃげていた
これも病の所為なのだと彼女は悲しそうに話してくれた
彼女の声は特別綺麗だったからよく村の祭などで歌っていたそうだ。
美しかった金の髪も心なしか艶がなく量が減っていた
変化は日に日におこっていたそうだが毎日顔を見ている分には気付
かなかったんだ。

それでも、彼女は美しかったよ

穏やかな表情 どこか寂しそうな笑顔
彼女は私に死ぬと言った

自分の最後の願いだから
後生だから

自分の所為で人が死ぬなんて堪えられないと

しかし 彼女こそ自分から死に向っている
だから私は

だったら一緒にいきます

と彼女に告げた、だが彼女は承知してはくれなかったよ
あなたはまだ生きられる人間だ
とね

それでも私は納得出来ずにいると

彼女は突然悪戯っばい、少女じみた表情で私に語り掛けた

『ごめんなさい、全部嘘なの。私が病気だっていうのもこれから死ぬっていうのも』

私は何の事だかさっぱり理解できなかった

実際、彼女の顔色は悪く、声も擦れているのに何を突然言い出すのかと思ったよ

上手くはないがもしや私を騙す為の苦しい言い訳かもとな

『あなたがあまり聞き分けがよくないから本当の事を教えてあげる。この「終わり」は別の場所に繋がっているの、だからここに飛び込んで死んだりなんてしないのよ。私はあっちに行くだけなの』

そう言うと彼女は可笑しくて堪らないというように声に出して笑った
私の思い違いでなければ心なしか彼女の声は以前のように明るいもののように聞こえた

呆然としている私をよそに

彼女はまっすぐ私を見てはつきりとした声で

『私に優しくしてくれてありがとう、ここはとても楽しかったわ。』

村の人にも私が病気だつて信じこませてあるから私が突然居なくなつてもさして驚かないでしょうけど、よかつたらあなたから一言私が「終わり」に飛び込んだと伝えて』

と言つた

いつものように少し寂しそうな笑顔で

私はそれでも彼女を止めたよ

病気でもなんでもないのでしたら何故行つてしまつたのか？

どうして「あっち」に行くというのか？

すると彼女は

『理由を言うのは意味が無いことよ、私が「行く」と決めた時点で誰にもそれは止める権利はないとおもはない？』

優しく微笑んではいたが彼女の言葉は鋭かつた

もちろん、私はそんな彼女を愛していたから

儚げで優しげで折れそうに繊細な外見とは裏腹に

恐ろしい程の強さ激しいまでの内面が彼女の魅力だつたから

『そんなに悲しまないで？あなたはこれからもつともつと世界を知りに行くのでしょうか？こんなところで立ち止まっただけではいけないの』

『さあ、月が沈む前にいくわ。…でも最後に私の故郷の歌をあなただけに』

引き止める事が不可能だとわかつた私は膝をつき彼女を見上げていた、すると彼女が慈悲深い表情で最後にそう呟いた

歌

そういえば何度か彼女が歌うのを聞いた

けれどもいつだって彼女は沢山の人間にむけて歌っていた
祭の時や祝い事の席や葬儀の哀歌

『あなただけに』

そういつて微笑むと彼女は声に旋律をのせた

空気の振動

声

旋律

月の

光

震える

魂が揺さぶられる衝撃

真っ直ぐに私を見つめる彼女の瞳

呪文のような歌詞

いつのまにか流れる 涙

「終わり」から生まれる風のおい

すべて彼女に捧げてしまいたかった

彼女に服従を誓いたかった

崇拜尊敬心服

それは あまり

「神」

を思わせた

恐ろしい程の美しさやあまりにも圧倒的な違いを

見せつけられると

人は拒絶か尊敬

どちらかの反応をするらしく

私は気がつく彼女の足元に膝き額を地面にこすりつけていた

ガクガクと震える拳を必死で握り

流れるがままの涙ごしに地面を見つめ

永遠のようなそれでいて一瞬のような時が過ぎた後

歌声はふいに途切れた

『ごめんなさい、どうぞ怯えないで…』

彼女の、いつもの優しげな声がし

私はやっと正気に戻れた

あわてて涙を拭い立ち上がる

…恐らく私は酷く情けない様子だったろうよ

彼女は私の為に歌ってくれたのに私は感動や感謝を口にするこ
とすらせず

呆然と彼女を見つめていたのだから

『ごめんなさい』

もう一度彼女はそう口にしいつものように
いや いつもよりももっともっと寂しそうに微笑んだ

『やっぱり私の想いはあなたに苦痛でしかないみたい』

私は必死になって否定した

そんな事はないと

彼女がどんな理屈であんなにも人の心を揺さぶる歌を歌ええるの
かはわからないが

私は彼女を愛していた

それだけはわかっていたんだ

…けれども私には彼女を引き止められなかった

『ありがとう、でももう行くわ』

…彼女は私のように未練たらしい躊躇などしなかった

「その人は…『終わり』に…？」

ああ 寂しそうに微笑んだまま
すっと つま先から消えていったよ

「死んじゃった の？」

……どうだろうなあ 『別の場所』に行ったのかも知れないしそ
うでないのかも知れない

……まあ 同じ事だ。私はもう彼女には会えない、彼女と連れ添うこ
とは出来なかったんだ

それから私は半分死んだようになって『終わり』について調べた。
神聖な場所だから迂闊な事はできなかったが私なりに必死になって
な。

いつからあるのか
誰が発見したのか
何の為にあるのか

答えは一つもなかった

それは古からあり

それは古から知られ

それは古から必要とされていた

何もわからなかった、わかるうなんて思うのは驕りだった。

…でもなフォー、私は確信しているんだよ

…いつか『終わり』は世界を飲み込む

「世界を？」

…ああ それだけはわかった、いや それだけしかわからなかった
…それ以上はわかつてはいけない

「…どうしてそう思ったの？」

わからないんだ どうしてわかったか わからないんだよ
ただ 恐らく彼女が『終わり』に消えたのも何か意味があった気がするんだが
どうしてもわかった事がわからない

…ああ こんな話は戯言だと笑ってしまっておくれ。
ただおまえにだけは話しておきたかったんだ。
話さなければいけない気がしたんだよ。

そういつきに喋りきるとリストムは長く息を吐き瞼を閉じました。

「少し喋りすぎたようだ、水をくれるかい？」

「うん、はい 大丈夫？」

フォーが心配げに顔を覗き込み水を渡すとリストムは一口飲み、しばらくすると微かな寝息をたてはじめました。

リストムの長い話（後書き）

この章、いらないかもなあ…。

サーカス

その子が団員に引つ張られるように馬車に戻ると周りのみんなはやつとガヤガヤと話始めました。

まるで、突然夢から覚めて現実に引き戻されたのに必死でその事を隠そうとしているような不自然さで。

その子が馬車に戻る前、最前列にいたリノとふいに目があいました。その子はひどく驚いた表情でリノを見つめました。

あたりまえかもしれませんが、リノは声を出さず溺れるほど泣いていたのですから。

「おや！リノどうしたんだい？どこか痛いのか？おじちゃんがおウチまで送って行ってあげようか？」

リノを前に呼んでくれた顔馴染みのおじさんは驚いて尋ねました。リノは急いで涙を拭い取り微笑ました。

「ううん、大丈夫。さっき誰か知らない人に足を踏まれてしまって…もう痛くないの、びっくりしただけなの」

「そうかい、悪い奴だな。こんな可愛いお嬢ちゃんを踏むなんて。こんどそいつを見つけたらおじちゃんが懲らしめてやるからな」

そういうと顔馴染みのおじさんはリノの頭をぽんぽんと撫でました。

「ありがとう」

リノは実年齢より幼く見える少女です。

リノと同じ年頃の子供に頭を撫でたりする大人はあまりいません、子供達はそうされる事を嫌がりますし、それに「自分達は大人ではないけれど小さな子供でもないんだ」という独特の信号を無意識に発しているからです。

けれどもリノは小柄な体躯や幼い表情のせいかな今だ小さな女の子であるように接せられます。

恐らくそれはある意味「擬態」なのではないかとリノは考えていました。赤ん坊が愛らしい様子で母親や大人に保護欲をそそらせるように、力のないリノは「まだまだ子供である」と大人達に思ってもらっていた方が都合がよかったのでしょう。

…既にこんな可愛らしさの欠片もない思考をしている私だけでも、もちろん リノはそんな考えを口に出す事をしません。

大人達の前で居るリノも口に出さぬ思考の奥のリノもひどく引つ込み思案でありましたから。

…けれども、私はみんなが思っているよりも幼くはないわ。

涙を拭き腫れぼったくなった大きな両の目で足元よりも少し上を見つめ、リノは歩きだしました。

チリン チリン

静かな草原に小さな、けれど耳に残る鈴の音が響きます。

肩にかかる亜麻色の髪をした少年がゆるやかな丘になっている草原を歩いていきます。

風の音

虫の声

チリン チリン

遮るもののない草原を覆う青空は果てしなく続いているように見えました。

育ての親を亡くした少年は小さな黄色い花を手に、ゆるやかな丘になっっている草原を一人歩いて行きました。

真っ直ぐ前を向いて

唇をかたく結んで

静かな草原です。

けれど耳に残る鈴の音だけが常に

チリン チリン

と寂しげに響いていました。

リストムの葬式は速やかに行われました。

彼が息をひきとるのを一人で看取ったフォーは半時だけ黙って手を握っていました。ふいに顔をあげ村長の家へとむかいました。

その顔にはもう涙はありませんでした。

不吉とされている贄の子が来たことで村はひどくざわめきました。

石を投げられるような事はありませんが、母親が急いで子供を家にいれる姿や男達が小さな声で吐き捨てるような言葉を口にいしているのを感じました。

村長はフォーを見ると露骨に嫌な顔をしました

そしてリストムの死を話すと苦渋に満ちた表情になり溜息をつきました。

…死を悼んでいる顔ではない。

ぼんやりとけれどそうフォーは確信しました。

…自分の処置に困っているんだ

…世話を押付ける後継人がいないから。

とにかく、といった調子で村長は2人の家に葬儀を行うだけの人を集め簡易的な弔いの儀を行いました。

リストムの遺体は小屋から少し歩いた小高い丘の上に埋められました。
遺体を埋めた後は長老が弔い詩を唱える決まりです。

13年前の予言をした長老は既にこの世におらず、その長老の没後はリストムが最高齢でしたが今となっては異国から流れてきたという小さな老婆が長老という事になりました。

小さな老婆は真っ白な髪にすこしだけ赤毛が混じっていてしわしわの顔の中に小さな瞳が輝いておりました。

「辛いねえ」

小さな瞳を少し潤ませながら、そう老婆はフォーに話しかけました。葬儀の中、初めてフォーは人に声をかけられ少し驚きました。

老婆の声はかすれていて決して上手いものではありませんでしたが、彼女が以前住んでいたらしい異国独特の節回しで歌われ、

それはとても　とても

純粹に人の死を悼んでいるのがわかりました。

そうして

フォーの永遠とも思える孤独が始まりました。

時間は瞬間の連続で　笑いかける相手がない日々は一瞬ごとに笑

顔を忘れていきました。

想う人がいなくなっても世界は過ぎていきます。
恐らく 自分がいなくなっても。

けれども孤独はフォーを殺してはくれません。

いくら精神を蝕んでも たとえ世界に意味を見出せなくても

ちっばけな世界のちっばけな村

風は草原を渡っていきます

空は苦しいほど蒼く高く

山に雲が薄くのびて

暗闇には白い月の光がとどき

百万の星が世界を見下ろしています

美しい世界です

「綺麗」

ぼそりとこぼれる言葉に 答えてくれる人がいたら

『つと』

その一言が

今どんなに願ったとしても

チリン チリン

身体を動かしていなくても

風が吹いていなくても

耳を手できつく塞いでも

チリン チリン

鈴の音がずっとずっと響いています

置いていかれる冷たい食事を

温めることすらどうでもよくなって

味もろくにわからないまま飲み下す日々がもう何日になるでしょう

…いつまで自分は生きなければいけないのだろう

小屋の壁に背をあずけ、床にぺたりと座り身体をまるめ顔を覆い
何度も何度も考えている疑問を飽きずに思考します

村長はフォーが10才になった位から二月にいつペン程小屋を訪れ
フォーの背を測っていききました。

その様子をリストムが静かな怒りをはらんだ瞳で見えていた事を覚えて
います。

そして村長が帰ると決まって

『ゆつくり大人におなり、時間をかけて』

そう呟くのです

その言葉がどう作用したか。

はたまた、まったく関係はなかったのかもしれませんが

12才になるかならないかぐらいから、フォーの身体は成長をとめました。

子供は今が一番目に見えて大きくなる時期です

村長はいぶかしみ

リストムは、けれど率直に喜べないでいました

食事は普通にとっています

病気もしません

手足の大きさからすれば もっともっと成長するはずなのです

…未練なんてないのに

心の底からそんなふうに思ってしまう自分が悲しくなりました
本当に もう どうでもいいのに

チリン チリン

耳の奥では 今も鈴が鳴り止みません

ある日、リストムの墓に行こうと丘を歩いているといつも摘んでい

く小さな黄色い花が閉じていました。

いつのまにか季節が移り花は種をつくる為の準備にはいったのです。

…もうそんな季節に

何をしていても何もしなくても時は過ぎます

何を感じても何も感じなくても時は動きまます

風の匂いも変わっています

空の色も変わっています

フォーはぐるりと世界を仰ぎ

まるで独りだけ取り残されたような気分になりました

…明日は何か他の供える物を持ってこよう

少しだけ寒くなりはじめたこの時期、丘の上の墓はなんだかとても寂しげに見えました。

ですからフォーは一層そう思ったのでした

墓の前で跪き

そつと地面に触れ 声をかけます

…寂しい

風がゴワツと丘をかけていきました

…自分は花を捧げることすらできない

自分を責めるようにしか考えることができない
優しかった人に安らぎ眠ってもらおうような言葉が出てこない

もう涙すら

ふいに、リストムの葬式で老婆が詠っていた歌がよみがえりました
死を悼み けれど祝福し いつかの再会を願う

あの歌

曲は覚えています
もちろん歌詞もすべて

フォーは自然と口をひらきました

歌うことなどほとんどしたことがないのに
驚くほど自然に
完璧な発声で
それは「歌う」ことを宿命づけられていたかの如く

少年の小さな身体から発せられているとは
とても考えられないような

透き通る

天へとつき抜ける

どこまでもどこまでも響きわたり

隠し通してきた世界の真理をさらけだしてしまつよつに

気付けば泣いていた

本当はもっと早く壊れてしまってもおかしくなかった
本当はもっと早く壊れてしまいたかった

けれどフォーは壊れてしまえるほど弱い人間ではなかった
延々と鈍く鋭い痛みを与えられ続ける拷問の日々に倒れることすら
できないでいた

誰もいない風のとおり丘の上
絞めつけられるような
硝子細工のような

声

たった一人の人間から生まれるその旋律は
風にかき消されることもなく
気付く者は誰一人いないであろうが
密やかにけれども確かに

世界を震わせていた

それから毎日フォーはリストムに歌をおくりました。
生前、一度歌ったきりでしたがその時リストムはとても喜んでくれ
ていたから。

フォーの歌は歌うたびに上達していきました。

俗世から一線を駕した

ある種戦慄すらおぼえる天上の歌声

そうして

歌声は掻き消えることなく

風にのり 村へと届いていたのです。

「神様の声が聴こえるよ」

はじめ、小川で遊んでいた子供達が言い出しました。

「幻聴じゃあない、精霊の歌声だ」

村外れに住む老人も証言しました。

「あの声が天使ではないのならなんだっていうの？」

糸を紡ぐ女達も口々に噂します。

その歌を聞くと、人々は視線を遠くになげ、深い暖かな闇をさ迷う
感覚に陥ります。

その感覚は不快ではありませんでしたが何かとても大事なものを必死で探しているようなけれどそれを見つけるのが恐ろしいような不思議な気持ちになるのでした。

不思議な歌声が村に届くようになって一ヶ月。

山奥にあり旅人も滅多に訪れないちっぽけなこの村に、どういう導きがあつてか巡業のサーカスが訪れました。

巡業サーカスは村人達に歓迎され、村にとって精一杯のもてなしをうけました。

そうしてご馳走を食べ、酒をふるまわれていた時例のあの歌 が聞こえてきました。

「…この歌声は？」

サーカスの団長は呆気にとられた表情で村人に尋ねます。

「ああ、これは山神の声ですよ」

村人は誇らしげにそう答えました。

「数ヶ月前に村外れに住んでいた賢者が亡くなられて、それから聞こえてくるようになったのです。私達が賢者を手厚く葬ったので神がお褒めくださっているんですよ」

「そうですか…」

団長は納得したように頷きましたが実はまったく信じてはいませんでした。

…この声の感じ、どこかで似たものを聞いた覚えがある。

巡業で、ちっぽけではありませんが世界中沢山の場所を訪れた団長は色々な神がかった現象を目にしてみました。

…たしかとても神聖な侵し難い空気の

団長の頭はすばやく過去に訪れた土地を思い出しています、彼の本能が先ほどからしきりに興奮を伝えているのです。

数秒後、酒のグラスを手に宙を見上げていた団長がニヤリと冷たく嗤いました。

村長は困惑していました。

先刻、サーカスの団長が一人で訪れ話しをしていたのです。

団長は単刀直入に切出しました。

「歌を歌っているのは少年ですね？」

村長はこの突然の言葉の意味がまったくわかりませんでした。

「なんのことですか？」

「隠さないでくださいよ、それともその少年はこの村の現神かなんかですか？余所者の私等には見せられないんですかな？」

「…なんことだか」

少し苛立ちを表情に出し村長が再度答えると団長は下卑た笑いを口元に浮かべました。

「この村についた時どこからか歌声が聞こえたんだがね村人に聞いてもてんで要領を得い。

神様だとか妖精だとか…でも私は知ってるんですよ？ありゃ『奇跡の声』だ。そうでしょう？」

「奇跡…？」

「村ぐるみでないとなりや村長、あんたが隠してるんでしょう？何千人に一人かの確率で生まれてくる『奇跡の声の子供』。私がちらりと聞いたのは確か中心街にある恐ろしく戒律の厳しい教会だったかな都市部ではそういう声を持って生まれてきた子供はいつきに位の高い僧になっちまうんでなかなか庶民にまでその歌声を聞かせてくれることはないんだが、たまたま盛大な100年祭だったんでね。白い僧服を着たまだ小さな男の子が歌うのを聞いたよ。信じられない高音、魂持ってかれちまうような陶酔感。まさに『奇跡』だ」

サーカスの団長は興奮を抑え切れなかったといった風情でしきりに手を動かしています。

けれども村長には団長が何故そんなにも興奮しているのかわかりま

せん。

ましてや『奇跡の声の子供』を自分が隠しているなんて。

「あいにくと村にはそんな子供はおりませんが…」

「何をおっしゃる、現に声ができるじゃありませんか？」

たしかに最近村には不思議な歌声がする。

決まって一日に一回、風にのるように微かな歌声が。

はじめの頃はなんだろうといぶかしんでいたが耳障りなものでもないでとくに気にしないでいたのだ。

「では『奇跡の声』だかなんだか知りませんがきつとどこかで子供が歌ってるんでしょう」

そう特に考える風でもなく村長が答えると

「その子供に是非会いたいです」

団長は今にも掴みかからんばかりに叫んだ

「な 何故ですか？ いや探すのは結構ですが、その 少しかりご熱心すぎやしませんか？」

団長の激しい形相に驚き村長は尋ねました。

「私は是非その子供を引取りたいんです。もちろん親御さんを説得します、その子に不自由な思いはさせませんし…礼金にいとめはつけません。この村にも少々寄付をさせていただいてもいい」

サーカスの団長は必死で緩む頬を引き締めようと努力しているようでしたが、それは失敗に終わりました。

唇を舐め、上ずった声を低く吐き出しておりましそれも無駄でした。

村長は大きく目を開き、なにかとんでもない事がおきる予感に恐怖しておりました。

チリン チリン

チリン

リ

ン

今日も墓の前で歌を歌います。

もちろん拍手も賛辞もありませんが誰かが聴いていてくれる気がするのです。

リストムのいる死の国にこの声が届いているのでしょうか？

この世界の「神様」にもこの声は聞こえているのでしょうか？

フォーにはそれがわかりません

尋ねる人がいません

そっと 墓の上に置かれた石に触れました。

日が出ている日中でも肌寒くなってきたこの頃、冷たくなってきた指先が小さく震えます。

骨張っていて皺の深いあの手は優しく温かでした

その人下に眠っているのにその石に温もりは感じられませんでした。

チリン

チリン

チリン

誰もいないことがわかっていて小屋に帰るのはいつまでたっても苦痛です。

いつそリストムの眠る場所にずっといたいと考えるのですがその場所あまりに村から離れているので戒めの鈴の音が届かないでしょう。

重い闇を抱え、それでも絶望にのまれずフォーは小屋に戻ります。

するといつもはまったくない「人の気配」が小屋から感じられたのです。

…また村長が背を測りに来たのだろうか

チリン

フォーは逃げることをしません。

けれどだからといって

立ち向かっているわけではないことをフォーが一番理解しているのです。

古ぼけたテント

世界がどんなにか危険に満ちていても ベッドの中、
布団に潜っていさえすれば安全であるとリノは思い込むことになって
いました。

それでも

気がかりである事や悲しかった事は否応無しに頭の中でくりかえし
くりかえし考えてしまいます。

忘れろ

忘れろ

忘れろ

毎夜毎夜 リノはそう唱えます

後ろ向きに前向きな生きかた

些細な事にとらわれていては生きていけないと理屈では理解してい
るのに

けれども今日は違いました

いつもでしたら知らない大人に怒られた日など、まるで再現を見せ
られているかのようにリアルな映像が頭から離れず知らず知らず泣
いているのに

今日は違いました

あの声はなんだったんだろう

美しい

けれど深い闇におちていくような感覚
切なさと儚さ

時折聞こえた

鈴の音

チリン チリン

…あの子は

…どっちがマシだったんだろう

垂れ幕の内側で時折射し込む陽の光に目を細め少年は虚ろな視線を泳がせました。

ガタガタガタガタ

もう慣れてしまつて気分が悪くなる事はありませんが、馬車に長時間揺られているのは身体に負担をかけます。

ガタガタガタガタガタガタ

自由でない事は少年にとってさほど苦痛ではありませんでしたが、狭い場所で身体が強張るのは苦しいものでした。

…次はどこに行くんだろう

村を出てからどれくらいたつたでしょう？

木々が葉を落としはじめた頃でしたからもう三ヶ月はこうして巡業していることになるでしょうか。

あの日、疲れた顔をした村長と对象的に、まるで獣が足を痛めた兎を見つけたような表情で
自分を見ていたサーカスの団長。

「私と一緒に来るんだ」

ぎらぎらした瞳で 弛んだ唇で

発した第一声は命令

それからずっと団長の言葉は命令以外なものでもなかった。

「死ぬまでの時間、どこで何をしようかと神様は関係ないとおっしゃるだろうからな」

下卑た笑い

「本当に一ヶ月に一回は背丈を計るんだろっな？逃げ出したりしたら私は村中からひどく恨まれる」

せわしなく汗を拭き顔色の悪い村長が団長に囁く

「心配なさるな、ちゃんとするさ。例の大岩を測った紐は預かっただろっ？それにおまえさん、例の金が欲しくないのかい？」

「それはっ…！」

「なあに、村の連中にはバレやしないよ。今だってあなたの女房が食事を世話してたんだろっ？それ以外このガキが生きてようが死んでようがどこにいようがわかりっこないんだ。ただいつかは例の『終わり』にほっぼりこむ儀式をやりゃいいんだろ？だったらなあんにも問題ないさ。」

「それに私等だってそう長い間コイツを面倒みる気はないのさ。コイツが使えるのは…そうさな。もって半年だろっ。」

フォーは目の前でおこなわれている取引が自分にとって良いのか悪いのかわかりません。

ただ 純粹に何かが変わる予感がしていました。

「半年、でも最高の質を維持している期間だ。『奇跡の声』は散り
ぎわが一番美しいのさ。まるで別れを惜しむように 最後の最後が
な」

団長が舐める様な視線でフォーを絡めました。

「サーカスの公演は明後日だそうだ」

朝食の席でお父さんが話していました。

リノにはお母さんがいません。

気難しく厳しいおばあちゃんと仕事であまり家にはいないお父さん
の3人家族です。

… 明後日 あの子はまた歌うのかな

リノは学校を終えると急いで家に帰りました。学校といっても教会
でやっている小さなものです。生徒もみんな近所の子で年もばらば
らでした。

リノは活発な子供ではありませんでしたが友達はそれなりにいました。
学校が終わると一緒に遊んだりすることも多かったのですが、今日
はまっすぐ家に急ぎました。

…耳について離れない

あの悲しげな旋律が 一日経った今でも
いえ 時間をおいて尚更

透き通る氷に胸を焦がされる

…サーカスの人達がいるテントを覗いてみよう

学校でもみんなサーカスの話題でもちきりでした。男の子達や年上
の女の子達は今日も見に行くんだと興奮して喋っていました。
いつものリノでしたら みんながそんな風に騒いでいても公演当日
になるまで覗きに行ったりしなかったでしょう。

…でも 何故か どうしても

リノはこっそり、ひっそりサーカスのテントの裏側に近づいていき
ました。

…決して騒がないし、サーカスの人達の迷惑にならなければ
…大丈夫

自分を奮い立たせて

…少し覗くだけで帰ろう

チリン

チリン

チリン

鈴の音

小さな

咳きのような音色

リノはその小さな音を敏感に気付きました
軽く目を見張り耳を澄まします

チリン

…そういえばあの子は手足に連なつた鈴を付けていた

その音はごくゆっくりと間隔をおいて響きます

…歩いているんじゃない、風に揺れて音が鳴っているんだ

リノは辺りを伺います

テントの裏手は静かでした。

ふと 小さな物の置きとして使っているような古ぼけたテントが目
に付きました。
鮮やかな色をした綺麗なテントや団員達が寝止まりに使っているで
あるう防水防寒のしっかりしていそうな丈夫な布で作られているテ
ントとは違う

簡素で古ぼけたテント

チリン

… ああ あそこにいるのね

まだ それらのテントから数十メートルも離れているのに
鈴の音は風に消えそうに響いているのに

リノは確信しました。

古ぼけたテント（後書き）

点や丸がどんどん無くなっていく…

出会い

テントに空いた虫食い穴から薄く陽が射し込んで少し眩しいくらいです。

入口を覆う無造作に降ろされた布は風が捲り上げてあまり意味をなしていません。

チリン

風が入るその度に手足の鈴が音を出します。

フォーは足を抱えて座り込んでいました。

特に拘束などはされていませんが「ここから出るな」という団長の命令はフォーを縛りました。

逃げ出す事ができるのにしない

それは愚かな事だとフォーは理解っていました。

けれども悲しみと孤独に蝕まれた精神では一人逃げ出しても長く命を維持してはられないであろうことも理解っていました。

フォーの歌声はどの村や町に行っても畏敬の対称になりました。

ある人は感動し敬い ある人は恐れ罵倒しました。

初めは自信に満ちていた団長も次第にフォーを扱いかねるようになりました。

ただ 綺麗なだけではない
ただ 可愛らしいだけではない

人はそんな言い知れぬ不安をフォーの歌に感じるようでした。

…「終わり村」

…まだ少ししか外をみていないけれど、あの話が本当ならこの村が『本物の天使』がいた村。

フォーはリストムが息をひきとる前に話した不思議な話をぼんやり
と思い出しました。

…たしかに村人は白い肌に金色の髪をしていた。

…でも、そういえば広場で

…もつと何か

…とても

チリン

風が 何の前触れもなく強く吹きました

バサ バサバサ…

小さく古いテントの入口布が大きく捲れます

「あ」

慎重に気配を殺しテントの入口近くに潜んでいた小さな少女が声をあげました。

強い風が彼女の黄金色の髪を乱します
色素の薄い、青い瞳が大きく開かれます

フォーは眩しさに一瞬目を細め、けれどその娘の青い瞳に吸い込まれるような錯覚を覚えました。

…薄い青、でもこの色は濃い紺碧を慎重に薄く薄くしたような本当に純粋な青の色
溶媒や白のような不純物をまったく混ぜないでただただ 「そのもの」 を。

突然現れた少女にもっと驚くべきであろうに、フォーはとっさにそんな事を思考していません。

…ああ 天使みたい だ。

…いや 「みたい」 じゃなく「天使」なのかもしれない。

少女と視線が絡んでいる瞬間

強い風が吹いている間

時間の感覚を失いかけている今

フォーはリストムの言葉をもう一度反芻し、そんな小さな子供ですら笑いとばす夢を思いました。

「あなたは」

少女が今にも泣き出しそうな声で

震える肩で

臆病な瞳で

「あなたはだあれ？」

そう 問いかけました。

風がゆつくり入口の布で遊んでいます。

その度に二人の視界を遮るのでリノはそっと布を押えました。

その子は膝を抱えたまま少し驚いた表情でリノを見つめていました。

…真っ直ぐな亜麻色の髪

…それに　なんて綺麗な容姿なんだろう！サーカスというのは可愛い子を集めてくるんだろうか？

その子の深い翠の瞳は髪と同じ色の長い睫毛に縁取られています。

見つめられたら己の心の汚れすら見透かされているようでリノは小さく震えました。

「あ…私は　　リノです。」

何故か目をそらす事ができない。

自分から行動することが何よりも苦手なリノにとってはそう一言口にするのすら精一杯気力を振り絞る必要がありました。

だから　本当に

この時微かにでも微笑めたのは奇跡だったのかもしれない。
リノは本能的に、必要にかられた時に微笑む事が出来る少女だったのです。

目の前で金色の髪をした少女がフォーに向かって微笑んだ。

自分に対しての警戒、緊張が手に取るようにわかるのに少女は微笑んだ。

手の平にのつた雪が溶けるような

そんな微笑。

この巡業についてまわるようになってからフォーは村に居た時のようなあからさまに恐怖や敵意に満ちた視線で見られる事がなくなりました。

ただ だからといって他所の町やサーカスで「温かな」待遇だったとは言えません。

サーカスでは団長が団員達にフォーを紹介するなりこう言ったのです。

「こいつを逃がさないよう見てるんだぞ、従順そうだが妙に聡いところがあるそうだ。可哀想だなんて同情して逃がしてもしたら……わかってんだろっな？」

団員達は厄介なモノをみるようにフォーを扱い、最初の何ヶ月かは夜眠る時逃げぬようにとフォーの足に枷を付けられました。

その後フォーが本当に従順で反抗の態度がまったくなくないと知ると、今度は雑用をあれこれとやらせそれ以外はまったく無関心でした。もちろん 数人の例外はあったのですが。

町や村でフォーが歌うと観衆は大抵の場合ぴたりと動きを止めます。その歌声にどう反応していいかわからないからです。

それから少し間を置くと絶賛する人間とそうでない人間に二分する

そうです。

フォーはいつも歌を歌い終わるとテントに戻されるので直接には絶賛してもらった事がないのでした。

放心したような状態の客のおざなりな拍手くらいしか。

…笑いかけてもらうなんてとても久しぶりな気がする。

…それも陽の光をほぐしたような黄金色の髪をした空色の瞳の可愛い少女

濃い蒼のワンピースからのぞく透けるように白い肌

…微笑んでいる

ただそれだけで

それがひどく幸福に思えました。

…リノ

…リノ？

…ああ たしかに『天使』とつけたくなるだろうな

フォーは少女を真っ直ぐ見据えたまま先刻からまったく変わらぬ姿勢でそんな事を考えていました。

2人はそうしてしばらく視線だけを絡ませたまま言葉を発しないで見ました。

静止 静寂 静観

その沈黙の刻はなぜかとても穏やかでした
敵意のない視線は心地良ささえ感じられました
それはとても長い時間そうしていたかのようでしたが
実際は瞬きを数回だったのかもしれない

「フォー」

その子が呟くように声を出しました。

…フォー

…古い言語で『終わり』の意

「フォー」

その子は自分を戒めるようにもう一度そう答えました。

「はじめまして フォー、…突然お邪魔してしまってごめんなさい」

邂逅の瞬間から動き出した2人はたどたどしい自己紹介をやっと終わらせました。

リノはその子をこんなにもあっさり見つける事ができたのが少しだけ不思議でした。

あの歌声に惹かれて

どうしても気になって

それが偶然だったかはわかりません。

けれども「運命」だなんて大袈裟なものではない　とリノは考えます。

何故ならばこの子の「声」はこの子が持って生まれたものでこの場所に来たのはリノの意志です。

リノは口に出して否定をした事はありませんが「運命」を信じない子供でした。

突然の訪問の非礼を詫びるとリノはやっと　幾分かほっとしました。けれどもそこで新たに困った事に気が付きました。

…なんて　なんて言えばいいのだろうか？

遠目にそっと覗いて見るだけのつもりでここまで来ましたが思いがけず発見し、自己紹介までしてしまったのです。

小さな子供でしたらすぐさま馴染み「友人になろう」などと恐れなく言い出すのかもしれませんがリノは見た目程子供ではなくましてや積極的に初対面の人間に接することなど考えた事もないような少

女だったのです。

…休んでいるところに突然押しかけてしまっただと迷惑なやつだと思われてるんだろうか？

…嫌な顔をしてはいないけれど、きっとそれはサーカスの団員だからできないだけなのかも。

不安はとめどもなくリノの心に広がり手の平にはじつとりと嫌な汗をかきました。

…何か言わなくちゃ

この子だって先刻から同じ体勢で立っているリノを訝しく思うでしょう。

リノは焦り、そして余計に頭は真っ白になりました。

出会い（後書き）

やっと主人公2人が会ったところ。

会話

…どうしよう

金色の髪をした少女はじっとフォーを見ています。

…何か 何か言った方がいいのではないだろうか？

フォーは今での人生でこういった問題に悩んだことが無いのでひどく困りました。

コミュニケーションが苦手というよりも知らなすぎたのです。

それでもフォーは必死で考えました。

…自分はこの子に初めて会ったので知り合いとして尋ねてきたわけではないだろう。

…かといって自分に用があったとは思えない

フォーは自分がいかに無知で役にたたない人間であるか、それが客観を持ってしてもその通りだと揺るぎなく理解っていました。

…では 何故この少女は自分のところに？

…サーカスの人間だから？

しかしサーカスへの憧れや物見を目的として来たのならばこんな裏の古ぼけたテントを覗く事はないでしょう。

フォーは膝を抱え、少女を見上げたまま微動だにせず考えていまし

たがやはり少女の目的がわかりませんでした。

…やはり自分は何か人として欠落している部分があるのかもしれない、

…だから彼女の思う事も理解する事ができないのかもしれない。

そう やりきれない気持ちで考えていると先刻からまったく動いていない自分に気が付きました。

…せめて立つた方がいいだろうか？ずっと見上げているのも失礼かも。

そう思い 今一度少女を見遣ると少女も先刻からまったく微動だにしていないように感じられました。

…あれ？

…もしかしてこの子、困っているのだろうか？

…私はこの子に会ってどうするつもりだったのだろうか？

…自分が何か言った方がいいのかもしれない

…あの声に惹かれてここまで来てしまったけれど
その事をそのまま言えばいいのだろうか？

…同じ年位の子となんてまともに話した事がないから
何をどう話せばいいのかわからない

…「感動しました」「この村は初めて来たの？」

「あの歌なんていう曲？」
「素敵な声ね」「すごく良かったです」
「…ところであなたは女の子？」

なんて言えばいいのだろう、どの言葉も陳腐な気がする

…ああ

…うつん でも

…少しでいいから話をしてみたい…

無言の空間

思考だけが積み重なります。

言葉にしていまえばどれほど容易いか。

幼いことが無邪気と同意ではないのです。

他人との関わりに恐れを抱いてしまった時から子供は小さな孤独を
一生必死に支え続けるのだから

大人になってからも

闇に呑込まれて泣かないように

チリン

チリン チリン チリン

チリン…

思い出したかのように鈴の音が二人の耳に届きました。

その音があまりに澄んでいてリノは、いいえ その音が呼吸のようになっているフォーすら驚きを隠せず小さく声をもらしました。

「綺麗な音ね、…前そういう飾りを踊り子さんが付けていたのを見たの。あなたも踊りを？」

先刻までの緊張が嘘のように、滑らかに喋る事ができたことをリノ自身ひどく驚いていました。

「うっん、いや 自分は歌だけ」

言葉があるだけでこんなにも空気が柔らかくなることにフォーは初めて気が付きました。

そして初めて、両手足首の鈴の音が少しだけ好きになりました。

「あの…きみはどうしてココに来たの？サーカスの人達は表にいるよ？」

「それは、ええ　私は…昨日広場で、その…」

リノはまた軽く言葉につまりましたがフォーの視線に咎めや責めがまったくない事を感じ

焦りを静めまともならない考えを飾る事無くけれど誠実に言葉にしました。

「昨日広場であなたの歌を聞いて　とても気になったの。すごく苦しくて、怖かった。なんて言えば…いいんだろう、恐ろしかったけれど　胸が潰れるかと思ったけれど　耳を塞ぐことはできなかったの。…のみこまれるかと思った。

あなたが神だというのなら　私はきつと信じてしまっわ」

最初はとても慎重に言葉を選びときれがちだった声

けれどその最後のセリフだけはあらかじめ決まっていたかのように

既に確信しているかのように

同じ人間が発したとは思えないほど
はつきり

疑いようもなく本心から言葉にされました。

「神」

呆然とその言葉の意味をフォーは考えます。

「自分が？」

神 神

神

… 神様

どうしてだかいつだってついてまわる

そしてどうしてその事を会って間もない少女の前で口にしたのか

「自分は神への捧げモノなんだ」

何度も何度も

胸の中で呟いていたセリフ

深い水底のような心の奥で意識している事

諦めを含む吐息にまぜて吐き出していた感情

嗚咽を堪え歯を食いしばった時に押し殺していた悲鳴

…それを言葉にすると

「自分は『神』のモノなんだ」

…自分は恐らく、ひどく情けない様子をしている事だろう

この村の人間は神への忠誠心があついと聞いたから

この子…リノは『神の贄』という事をどういう風にとらえるのかわからないけれど。

リノははじめその子が言った事がわかりませんでした。

ただ その子…フォーの表情が、恐らくリノとそう歳がかわらないであろうフォーの

あまりに…

「あきらめ」になれてしまっているその表情が。

リノはテントの入口布から手を放し少しだけフォーに近づくとそつと屈みました。

互いの視線が水平に合わさる高さ

フォーは少しびくりと身をひきました。

リノは普段自分から人に近寄る事をあまりしない少女です、

なぜなら 拒絶が怖いから。

けれどフォーが身をひいたのは『拒絶』では無い　とりノは一生懸命自分を奮い立たせ

もう一度

今度は先刻よりも小さな声で
物心付いた時には確信していた事を
知らなくとも理解っている事を

この村の人間として言葉にするのは禁忌である事を。

「あなたが神の為に在るのではないわ『神』が『あなた』の為に在るのよ」

会話（後書き）

なんだかこのへんはまどろっこしいあたりです。

一応最後までできてはいます。中間ちよっと変更したいけど。

リノとかみさま

私達はいつも神の導きに従い神の恩情により生かされている

祈りなさい

跪きなさい

敬いなさい

迷い戸惑う罪深い私達に神は許しを与えて下るのです

私達の左手の小指から神は力をお送りくださいます

私達は神の為に日々を重ねます

貧困や飢えも全ては神の試練

私達は絶望を捨て祈り信じます

私達をいつか死ではなく光の国へと導いてくださる

神を信じて

毎日毎日

リノは食事の前と眠る前にお祈りをします。

物心付いたときには暗唱できた祈り言葉を呟く事は神官の職についている父の娘である自分にはむしる義務でしかなかったとしても。

『神が私達に命をお与えくださったいたって感謝を忘れず幸せに溺れず 祈りを捧げなさい』

『そうかしら？父さん。だってリノは神様にお会いしたことがないわ』

『リノ、全てが目に見えるなんて思っではいけないよ。神は目に見えなくてもいらっしやるだよ』

『そうかしら？父さん。だってリノは神様とお喋りしたことがないわ』

『リノ、神は全てわかっていてくださるから口を使って話さなくてもリノの事を全て知っているんだよ』

『そうかしら、父さん……。』

…そんなことないんじゃないかしら？

どんなに苦しいことがあってもどんなに悲しいことがあっても『神様』はリノの前には現れませんでした。

大人はいつだって正しいわけではありません。

いつだったか、リノは悪くないのに先生の勘違いでひどく叱られた事がありました。

勘違いであることがわかった後も先生はばつが悪そうな表情をして顔を顰め

「あなたが間違われるような事をしているのも悪いのよ？」
などという子供のリノに謝る事をしませんでした。

それはとても とても胸が痛かったのに、家に帰りその事を父さんに話すと先生と友人である父さんは先生の肩を持ち

「リノは少し大人し過ぎるしモノをはつきり言えないから先生だつて困っているんじゃないのかい？」
と軽く笑いました。

だからリノは神様に祈りました

だれでもいい

「辛かったね」と言って抱きしめてほしかった。
先生を責めてほしいのではなくて、ただただ「リノは悪くない」と言ってお安心させてほしかった。

けれども

神様に祈っても何も変わりはありませんでした。
それはあたりまえかもしれませんが。

「神様はご存知」

…知っているから何？

…知っているのに何もしてくれないの？

…だったら意味なんてないじゃない。

苦しい悲しい寂しい

そんな時 手を握ってくれる事もしない神に何を望めというの？

私は光の国に導いてもらえなくなっただけいいわ

誰かの『慈悲や憐れみ』にすぎるなんてまっぴらよ

だって母さんは『神様よりもリノが大事よ』って私に言ってくれたもの。

目の前にいる少女の瞳は薄い空色

けれどそれは映すものによって色を変えるようでした。

「神が…？」

ふと 少女の表情が最初そうだったように、少し怯えたよう弱々しい印象に戻り

「あ あの ごめんなさい、突然。そのなんでもないので、怒らないで…私、その…あなたと話してみたくて…め 迷惑だった？ごめんなさい すぐ すぐ出て行くから…」

慌てているのか、上手く舌が回らずその事が一層彼女を焦らせついに赤面したまま俯いてしまった。

元々幼い顔立ちの少女であるのに加えその仕草があまりに無防備なのでフォーはやっと、そしてそれはとても久しぶりに小さく微笑んだ。

「もしかして広場にいたの？自分は歌っている時ちゃんと周囲をみていなくて…」

「あ ああ えっと…そうなの一番前の方にいたのだけど…私小さいから…」

「……………そういえば 広場で歌わされた時なにか目の端に光っているのが見えた気がしたのだけれどリノの髪だったのかも、黄金色」

笑う事を忘れていた月日 他愛無い会話 髪を撫でるやわらかい風

やっと顔を上げた少女を見てフォーはふと考えました。

…これは『神』の最後の慈悲かもしれない。

リノとかみさま(後書き)

読みにくい書き方ですね、我ながら。

幸福と恐怖

自分は存在を疎まれている　そして誰からも愛されていない
唯一だったあの人がいなくなった日から

現在、そしてこれから

生まれてきた理由

その疑問を誰しも一度は考えるのだろうか

『…自分は果たして』

子供達は大人になりその疑問の答えを見つけ得るかもしれない。
大人は老人になりその疑問を解くかもしれない。

一匹の蜘蛛を助ける使命を持って生まれた子供
沢山の人々に物語を語る為に生まれた少女
大きな橋を渡す力を授かった男
飢餓に喘ぐ沢山の人間を救う運命の女

答えはいつだって自身が決める

けれども もう自分には時間がない

… 自分は何なのか？

… 死ぬ為に生まれてきたのか？

フォーには答えがわからない

大人になれない自分にはきつとずっとわからない

「フォーはどこから来たの？」

狭いテントの中、ペタンと床に腰をおろしけれどまだ少し緊張をと
けずにいるのか、

金色の髪をした少女は濃い蒼色をしたスカートをきつく握りしめて
いる。

「この村からずっと北にいった小さな山間の村。…地図に載っているかはわからないくらい」

フォーは村村を移動する際、身体を屈めないと入れない程狭い荷馬車につめこまれていましたが方角やこの世界での大雑把な位置をきちんと理解していました。

リストムと暮した小さな小屋にはリストムが自分の足で歩いた世界の地図が壁に貼られていました。

『ちつぽけな世界だがこの世界には美しいものや大切なものが沢山ある』

リストムはいつだったか、目を細めてそう話してくれました。

「北の村…。そこにフォーの家族がいるの？それともみんなサーカスに？」

「…………それは…」

言いよどむフォーの様子を見て、少女はあわてて

「答えなくていいの、ごめんなさい」と言葉を次いだ。

人に踏みすぎる事を畏れている。人が傷つく事を畏れている。

申し訳なさそうにまたもや俯いてしまった臆病で優しい少女。

…ああ

…彼女は耳を塞がないで聞いてくれるだろうか

チリン

チリン　チリンチリン

リン

枷であるはずの鈴の音がなぜだか澄んだ美しい音色に聞こえます。

…その鈴の音があるとフォーがどこにいるかすぐわかるわ

あの日からリノは毎日顔を出してくれるようになりました。

いつも小さなテントに一人で座っているフォーに毎日会いに来てくれるのです。

そしてただ、何をするわけでもなくとりとめもない話をしたり

小さな子供のように手遊びをしたりして、学校が終わってから夕暮れまでリノは側にいました。

フォーは結局自分が『おわり』に投げ込まれる贄だという事を抜かして話をしました。

リストムという優しい老人と二人で村外れに暮らしていた事

村人達は皆フォーを快く思っていなかった事

期限付きで村長がフォーをサーカスに売った事

その話をリノは一言も口を挟まずに聞いていました。俯いた顔色は青く、小さな拳が白くなっていました。

そして

「フォー、寂しくはない？」

と寂しさを知っている人間独特の呟くような疑問を口にしました。

「寂しさは永遠ではないから。」

フォーは2つの意味をこめてそう答えました、けれど 説明はつきません。

否、つける事はできないのです。

ぎこちなかった微笑が一緒にいるうちに心なしか自然になった気がする。

リノは持参した焼き菓子の包みをひろげながら考えました。

…フォーは整った容姿をしているから無表情で遠くを見ていると近づき難い印象を受ける

…笑っている時はこんなにも優しげなのに

焼き菓子の包みをひらくと、フォーがそっと覗きこみました。

煮詰めた林檎をパイ生地で包み焼きしたこの村では極々一般的な子供のおやつ

「フォー、林檎パイ好き？」

「……食べた事がないからわからない」

フォーが少し困ったように微笑む

…フォーはいつも

リノはパイを切り分けながら思います。

…フォーはいつも

…胸が引き裂かれそうな切なさを風に撫でられたような微笑で越えるから

パイの下に赤い花が描かれた芥子色の紙をひきます。パリっとしたパイ皮が少し剥がれて落ちました。

…私に話してくれたのが全部ではないのはわかっている

…けれど私にはそれだけでもう胸が潰れるほど悲しかった

手がパイで汚れた時ように持ってきた白いお絞りをカゴから出します。

リノは他人の痛みや苦しみに危ういほど同調してしまう子供でした。学校で先生に鞭で手を打たれている子がいれば、それを見ているリ

ノの手もひどく痛み赤く腫れていることすらありました。

「この林檎パイ、おばあちゃんと一緒に作ったの。もし嫌いじゃないようだったら一緒に食べよう」

「いいの？」

「うん、私っいたらいつも遊びに来てたのに、おやつを持ってくるの忘れてたんだもの。フォーと一緒に食べようと思って昨日から林檎を煮詰めて先刻焼いてきたからまだあったかいはず」

こっばしい香りが小さなテントに広がります。
林檎の甘い匂い

フォーはパイを一口齧ります。

パイの中の林檎はまだ熱いくらいでトロトロに煮詰められています。

…甘い

「美味しい」

フォーがそう呟くとリノが目を細めて微笑ました。

…どこまでが現実なのだろう

一度の幸運を喜ぶ事は簡単です。

けれども幸せは続けば続くほど恐ろしくなるものなのです。

いつ幸せが終わるかわからないから

いつ不幸になるかわからないから

…『幸福』の何パーセントかは『不安』で構成されている。

…少なくとも自分の場合は。

「あしたも来ていい？」

リノが不安そうに、帰り際になると必ずそつたずねます。

「うん」

何気なく頷きますが、本当はその一言を言ってくれなかったらどうしようとして一日中考えています。

どうして「明日も来て欲しい」と言えないのだろう？

帰り際でなく、その日会ったらすぐに言えば会っている時も不安でいなくていいのに。

…こわい

チリン　チリン

鈴の音が聞こえます

風も無いのに。

幸福と恐怖（後書き）

ですます調に統一するべきだった…。

ラズベリータルト

『じゃあ また明日』

フォーと一緒にいるとまっすぐ世界が見つめられる。
顔をあげて歩ける気がする。

些細な事にいちいち怯えて生きている自分をフォーの側にいると許してもいいという気持ちになれる。

…もしかしたら、これは愛情とか恋とかいう感情によく似ているのかもしれない。

まるで他人事のようにそう考えながらリノは今日もお菓子の入ったバスケットを手にサーカスのテントへと向いました。

サーカスが始まって4日、つまりリノ達が出会ってから6日目の午後。

空は眩暈がするほど美しい蒼でした。

「フォー、はいつでもいい?」

「リノ? うん どうぞ」

いつもと同じ最初の会話

けれども今日はそれが悲劇のひきがねになったのでした。

「フォー、誰かきたのか？」

リノが布を捲くりテントに入った瞬間テントの外から男の声がしました。

そして声の主がテントに近づいてくる足音も。

「団長……」

フォーが心なしか血の気の失せた顔で小さく呟きました。

乱暴にテントの布が捲られました。

二人はぴたりと動きを止め息をすることさえ止め、凍りついたようにテントの入口に視線を固定していました。

背の低い赤ら顔の中年の男がいかめしい表情で姿を表しました。

「お嬢ちゃん、この村の子だね？」

ねめつけるようにリノをジロジロと見ると今度はフォーに視線を投げ

「大人しくしていると言っただろ?! 誰が人を居れていいと言った? 誰が飯を食わせていると思っっているんだ? いくら田舎のガキだからといって自分の立場ってもんを理解できないのか!?!」

と いらただしげに吐き捨てました。
それはそういう言葉を幾度も幾度も口にしていて人間独特の逆らうことを赦さない、言われた者に自分が虫けらであるような錯覚を持たせる、ひどく威圧的な口調でした。
それからもう一度リノを見遣ると

「お嬢ちゃんも勝手にテントに入るなんて駄目だろう？サーカスだつてお金を払ってみるもんだ。こんなとこでこそこそしているのは泥棒だぞ」

フォーに対する口調よりはいくぶん抑えてありましたが、小さな子供でしたらすぐに泣き出してしまいそうな低く凄みのある声でリノを叱りました。

リノは叱られるコトに弱い子供です。

しかもこんな見ず知らずの大人に、近所の人や学校の先生ではなくまったく知らない大人に恐ろしい形相でにらまれて。

「ごめんなさい団長、リノは自分が…」

「お前は黙れ！！！！」

フォーが言い終わらぬ前にテントが震えるほどの声で団長が鋭く叫びました。

大の大人でもすくんでしまうような激しさを前にして、しかしリノはすっと顔をあげました。

涙はありません、かわりにその明るい空色の瞳は冷静な銀色の光を

湛えていました。

「私フォーに村を案内してあげたいの。いいよね？団長さん」

それは唐突に。

あどけない口調、無邪気な笑顔。

「な…？」

今までの会話をまるで無視したような少女の発言に団長は一瞬毒気を抜かれ目を丸くしました。

「だってね フォーずっとココにいるんだもん！サーカスの出番じゃない時もずーっと。もちろん、サーカスのお手伝いが忙しいのはわかるけど折角お友達になったのに、一度もお外で遊べないの。そんのおかしいでしょ？私のパパだって『子供はお外で遊びなさい』って言うわ。私のパパ、神様にお仕えするお仕事しているの。あそうだわ！団長さんもパパに会ったでしょ？パパ、この村の代表も兼ねているから。…ねえ団長さん、フォーとお外で遊んでもいいでしょ？夕方になるまでには帰ってくるわ！学校の先生もね『サーカスの人達に親切にしましょう』って朝礼で言ったわ。私フォーに村を案内してあげたいの。いいでしょ？」

空色の大きな瞳が汚れを知らぬ様子で団長を見上げています。

少し舌つ足らずな喋り方は少女の幼い顔立ちと相成り無条件に保護を約束された者にしかだせない傲慢なまでの純粹さを発していました。

「いいでしょ？」

…駄目だなんて 言わせない。

「別におじさんがこの子を閉じ込めているわけじゃないんだよ」

先刻とはずいぶん態度を変え、いいわけをするようにそう言いました。

「お嬢ちゃん、サーカスは子供をひどく扱うなんていうよくあるおかしな噂を聞いたのかい？あれは真つ赤な嘘さ。君のお父さんはジエロウ神官だね？立派な方だ！私達サーカスの事をこの村に来る観光客にも広めてくれると言ってくださった素晴らしい方だ！…いや そんなことはいい。ともかく、おじさんはちつともココを出ちゃいけないなんて言ってないんだよ、この子を閉じ込めてるなんてデタラメ話を村の人やお父さんに言うんじゃないぞ？」

リノは先刻からずっと団長を見つめたまま居ましたが一瞬俯き、うすく 嘲笑しました。

「でも、フォーは出られないようなことを言っただわ」

「それはきつとおじさんが『あんまり村をつるちよろすると迷子になるから』と注意していたからだよ」

団長は慌ててそう言つとフォーを見遣りそうだな とねこなで声を出しました。

「…はい」

フォーが小さく頷きます。

「そう！良かった！！これで村を案内してあげるわ。」

「あんまり遠くに行つておじさんを困らせないでくれよ？…フォー、わかつているな？」

前半はリノに、理解ある大人を装つた笑顔で。

後半はフォーに同じく表情は笑顔で、しかし冷たく言い放ち、団長は乱暴に布を捲くりテントを出て行きました。

数秒の沈黙

「こわかった…」

そう呟くとリノはペタリとしゃがみこみました。

今頃になって背中がざわざわとしてきます。

けれども恐ろしい思いをしただけの事はありません、フォーを軟禁状態から外に連れ出せるのですから。

「だいじょうぶ？リノ」

気遣わしげにフォーがたずねます、そしてあの ひどく儂げで硝子のように透明な微笑みを浮かべながら言いました。

「ありがとうございます」

…ああ もしかしたら人は

…自分の為よりも大事な人の為に

…強くなれるのかもしれない

リノはふと そう思いました。

先刻の行動や言動はいつものリノからは考えられないものばかりだったから。

「フォー、今日はラズベリータルトを焼いてきたの」

「私が小さい頃 おばあちゃんによく連れて行ってもらう た東の水車小屋近くに行ってみない？そこなら村の近くだし。きっと今の時期はタンポポの綿毛が綺麗だと思うの。」

持ってきたバスケットを掲げ、リノはやわらかく微笑みました。

ラズベリータルト（後書き）

ラズベリータルトなんて食べたことないけどね。

たんぽぽ

チリン チリン

顔を上げると果てを知らぬ空がどこまでもどこまでも高く広く
頬を撫でる風は心地よく、裸足で踏む地面にはやわらかい草が生え
ています。

白い一枚布の服は薄手でしたが午後の日差しは暖かで風がハタハタ
と裾を遊ばせました。

横を見ると

金色の髪をした透けるように白い肌の少女が、骨の髄まで沁みこん
でしまった寂しさや苦しさや絶望を抱きしめ溶かすように微笑み

「行くっ」

と 小さく折れそうに細く白い手を差し出しました。

… ああ やっぱりそうなんだ

… これは『神からの最期の慈悲』

… 『リノ』

… 天使は神の使い

…神が自分にリノを遣わしたのだろうか？

…だとしたら こんなにも愛らしい少女を遣いにするなんて

…神は悪魔だ

水車小屋は小麦の収穫の時期以外とても静かな場所です。

今は小さな子供とその母親がのんびり散歩をしたり

仲の良い老夫婦が薬草を摘みに来たりしている姿が見られます。

シヤラシヤラシヤラ…

水が水車をまわします。

穏やかに、子供の笑い声のような音をさせながら。

リノは顔見知りの母子連れに小さく会釈をしてか綿毛をつけたタンポポをつみそつと吹きました。

白い綿毛は風に乗りに楽しげに舞いました。

まだ歩き始めたばかりらしい小さな子供が高い声で笑い綿毛を掴もうと手を伸ばしています。

「フォーのいた村にもタンポポは咲いていた？」

「タンポポ……………」

「うん、今は綿毛だけど。花は黄色ですごく可愛いのに」

…黄色い花。

…ああ、そうか、あの花は枯れていたのではなくて

…綿毛になる準備をしていたのか。

外で食べるといつもよりお菓子が美味しい気がするの。

と、リノが真面目な表情と呟きます。

フォーは頷きながら、けれど、と考えます。

リノと一緒に食べた菓子はいつだって驚くほど美味しかったと。

すると菓子のおいにつられて綿毛を追っていた子供がフォー達に近づいてきました。

2人のすぐ傍まできても子供は母親はにこにこ微笑んでいます。

フォーは緊張に身を硬くしましたがそんな事を知ってか知らずか子供は小さな小さな手でフォーの頬に触れました。

「ねえね、ねー？」

まだ歩くことになれていないらしい子供はフォーの頭につかまり立ち、くるくるとよく動くおおきな瞳でじっと見つめてきました。

「ねえね？」

「??？」

子供はなにやらしきりに首をかしげ言葉らしきことを言っています
がフォーには理解できません。

そうでなくとも、小さな子供に触れられている緊張で身体が固まっ
てしまっているのです。

そんなフォーの様子を尻目にリノは隣でクスクスと笑うばかりでし
た。

「シエラ、だめでしょ？ごめんなさいね、おやつのお邪魔してしま
って」

のんびりと見守っていた母親が微笑みながら近づいてきました。

「おばさん、シエラはなんて言っているの？」

リノは知り合いらしいその母親に尋ねます。

母親はちよつと困ったような表情をしてからフォーに気遣うように
微笑みました。

「ええ、そのね…そちらの綺麗なお友達がお姉ちゃんなのかしらお
兄ちゃんなのかしらって」

リノは「ああ それで『ねえね？』なのね」と納得しています。

しかしフォーは一瞬なんの事だかわけがわかりませんでした。

フォーは村で異質な者として誰からも知られていましたし、サーカ
スでも親密な団員とのかかわりがなかったのでそういった誤解は今
までされたことがなかったのです。

…自分は性別すらわかんないような容姿なんだろうか

フォーの頭の中ではなにやらぐるぐると衝撃が渦巻いております。そして、もしかと思い、恐る恐るリノに向き直りました。

「リノ。…リノは知っている？」

フォーが少年であることをわかっている？

「……………」

リノはタルトを持ったまま硬直しています。

…リノ 知らないんだ

フォーはなんだかとても情けない気持ちでいっぱいでした。

目の前でくりひろげられている微妙な空気を感じとったのか、シエラとよばれた子供の母親は気遣わしげにフォーに言葉をかけました。

「美人さんは中性的に見えるそうよ？……女の子よね？気にしない
であなたはとても可愛らしいわ」

…性別がわからない場合はとりあえず「女の子？」と聞いておけば間違いない。

…なぜならばもし違っても「まあ！やさしい表情だからってつきり」と驚いてみせれば事なきをえるのである。

リノは以前祖母に教えられたそんな話を思い出しました。けれどもそれは赤ん坊に対してであったように思われました。現にシエラの母親の言葉を聞き、フォーはどう見ても落ち込んでいたようでした。

「えっと、フォー…？」

「ねえねー？」

小さなシエラは何も知らずにはしゃいでいます。

母親はフォーの近くに座りシエラを膝に乗せました。

そして少し申し訳なさそうに

「シエラ、『いにいに』よ。『お兄ちゃん』。ママもあんまり可愛いからまちがえちゃったの。ごめんなさいね。きつと今にかっこよくなるのよー？シエラお嫁さんにしてもらうー？」

とシエラをあやししながらあやまりました。

するとシエラは母親の手をむずがり、フォーに手をのばしました。

「まあ、すっかり気に入っちゃったのね」

満面の笑みで手をのばすシエラを驚いたようにフォーが見つめまし

た。

その様子を見て母親が微笑みました。

暖かな午後です。

いつまでもいつまでも 日が差しているように子供からする甘いミルクのおいのように白い綿毛はまたひとつ風で消えました。

母子はその後少しリノ達と言葉をかわすとシエラの昼寝の時間だからと帰っていきました。

「可愛かったね、シエラ」

「うん」

「フォーは男の子だったんだね」

「……うん」

「…私は女の子だよ？」

「……うん」

少年と少女は同じようでもしかしたら男と女よりも違う生き物です。

砂糖菓子と花といろいろな可愛らしいもの

そして残酷と頑な

恐ろしいほどの思い込みと

戦慄するほどの激しさ

自分が少女であることを本当はいつだって憎んでいる

鉄屑と銃とたくさんの希望

そして無知と刹那さ

悲しいほどの純粹さと

絶望するほどの鋭さ

自分が少年でなくなってしまうてもその事を受け入れられない

だから

あまりにも不安定であまりにも心細くて

自分だけで手一杯なくせにいたたまれなくて

手をつないだのかもしれない

「そろそろ帰ろうか」

「団長さんが怒るといけないものね」

「…明日も来てくれる?」

「明日も会ってくれるの?」

チリン

久しぶりに 明日があることが
久しぶりに 明日になることが

チリン チリン

チリン

たんぽぽ（後書き）

すでに矛盾が出てきたぞ…

左手の小指

テントでフォーと別れ、リノはいつものようにサーカスの舞台用テントの横を抜けて村へと急ぎました。

あたりはまだ明るいです。夕方の気配がしました。

今日の夕食は芋とベーコンのスープだと家をでる時おばあちゃんが言っていました。

…早く帰って芋の皮むきを手伝わなくちゃ。

リノの祖母は厳しい人でした。

女は料理や裁縫ができなくてはいけないと小さな頃からリノに言い聞かせ育てました。

リノは料理の手伝いが嫌いではありません。

けれど祖母の前で少しでも行儀悪くしようものなら無言で手を叩かれるのが昔からとても恐ろしかったのです。

サーカスのテントからは楽しい音楽が聞こえてきます。

これから夜の公演が始まるのかもかもしれません。
と

「おちびちゃん、もうおうちに帰るのかしら？」

突然肩をつかまれ、そっと耳元でささやかれました。

リノは驚き身体をこわばらせました。

「あなたいつもあの子に会いに来てるお嬢ちゃんでしょ？」

精一杯の勇気をふりしぼり振り向くと、そこには妙齡の美女が赤い紅を刷いた蠱惑的な唇の端を上げ嫣然と微笑んでいました。

その女は長く濃い睫毛に縁どられた灰色の瞳をそれはそれは大きく見開き感嘆ともいえる口振りで呟きました。

「あら まあ！なんて可愛らしいお嬢ちゃんだこと！あの女の子みたいな坊やもすみにおけないわね」

そうして驚いたままかたまっているリノの頬を左手でつつつきました。

「若いわ！！このお肌の張り！なあにこの透き通るような透明感！ああああ…お姉さん嫉妬しちゃうわ」

身を振り大げさに肩を竦めます。

…なんだろう、なんなんだろう。

害意はなさそうですが変な人です。

リノは走って逃げてしまおうかとちらりと思いましたが小さな頃から失礼な事をしないようにと厳しく育てられたのでそれもできませんでした。

それに少し気になることもありました。

「あの…お姉さん、フォーを知っているの？」

『女の子みたいな坊や』たしかそう言ったはずです。

女は嘆く動作をぴたりと止めもう一度唇の端を上げ、今度はニヤリと笑いました。

「知っているわよ、あの綺麗な男の子。『神へ生贄』なんていう馬鹿げた悪習の犠牲者。」

その言葉にリノはだじろぎ、改めてその女を見つめました。
女は紅い唇を薄く開きクスクスクスクスクスクと止め処もなく、抑揚もなく、まるで感情をなく笑いました。

軽くあごにあてた細い指。

左手

根元から無い

小指

私達はいつも神の導きに従い
神の恩情により生かされている
祈りなさい

跪きなさい
敬いなさい

迷い戸惑う罪深い私達に
神は許しを与えて下るのです

私達の左手の小指から
神は力をお送りくださいます

私達は神の為に日々を重ねます

貧困や飢えも全ては神の試練
私達は絶望を捨て祈り信じます

私達をいつか死ではなく光の国へと導いてくださる
神を信じて

祈り言葉が駆け巡ります。

左手の小指

運命とか神聖さとか祈りとかそういったものにひどく深くかわつ
てくる

特別な部位

リノは礼儀に欠ける行為であることも忘れ女の左手を強く凝視して
しまいました。

「気になる?。」

女はさして気にする風でもなく口元から左手を動かしリノの顔前でひろげます。

指が生えているはずの場所は指がちぎれた様子もなく皮膚はなめらかに綺麗です。

「はじめからよ?生まれた時からなかったの」

リノは驚き女を見上げます。

「はじめから...?。」

「そう、私には左手の小指がないの」

にっこり 紅い唇

腕をくみ首をちょこんと傾げる仕草

なめらかな曲線を描く肢体

それを包む薄い絹

「ねえ、お嬢ちゃん。お友達にならない?おねえさんアナタとお話してみたいわ」

「……………」

大人の女性と「お友達」なんて奇妙な感じですが、
けれどもリノは小さく頷きました。

小さな村、父親と祖母という家族の中で育つてその中の価値観や
思考しかない自分が最近は何となく矮小に思えるのです。

そうでなくともリノは小柄な少女です。

こんなちっぽけな世界のはずなのに世界の大きさを考えると押しつ
ぶされてしまうような感覚にしばしば陥りました。

…もつと、もつと知らなければいけない。

…『いつか』の為に

…私の大切な『何か』の為に

「私はリノです」

「リノね。おねえさんはアジェル。敬語使わなくていいわ、お友達
になるんだから」

傾いていた日が最後に光を地上に与えています。

赤い紅い朱い

光

夕方の薄寒い気配の中でその色は燃えているように見えました。

幸福な子供

フォーはテントに戻ると少し曇ったグラスに水差しから水を注ぎました。

夜公演の前座に出なければならぬのです。

人前で歌を歌うことに抵抗はありません。

極端に狭い世界で生きてきたフォーは大勢の観客の中舞台に立つことにももちろん最初戸惑いを覚えました。

けれど けれども

結局は何もかわらないのです。

数え切れない人間の前で歌っていてもあの人の眠る小高い丘の上
人で歌っていても

本当に聴きたがってくれた人が

本当に聴いて欲しかった人が

そこにいないのなら

結局何もかわらないのです。

…この声が消えたら

…この命も終わるのだろうか

大人になれない事を小さな頃から意識していたけれど、この細く頼りない身体が村の男達のように逞しく成長することを想像すること

は難しく

それに

『ゆつくり大きくおなり』

やさしくあたたかく、低いしわがれた声、慈愛に満ちたあの表情
けれども隠しきれぬ悲しみを湛えた

あの表情

…大人になりたいなんて思わない

…贅として生かされているのだってかまわない

…ただ

小さな手

頼りない身体

少女のような声

あの人はきつと 心配でならなかっただろう。

…大人になれば この身体が成長できたら

…あなたよりも背が高くなって、力も強くなって支えてあげることができたのに

小さな頃背負ってくれたあの広い背中

年々痩せて腰が曲がり皺が増え最後は歩くことすらできなかったあの人

… 恩返しもできなかった

… 自分は最後まで「小さな子供」のままだった

テントの外から夕日が差込み、手に持ったグラスの水が赤く染まりまるでワインのように見えます。

サーカスのにぎやかな音楽がいつそう強く流れてきます。

もうすぐ団長が苛々した声で叫びながらフォーを連れにくることでしょう。

「『神へ生贄』とはどういう意味？」

その言葉の衝撃を思い出し、リノは震える声を絞り出すようにして尋ねました。

「自分は神のモノなんだ」

その言葉の意味をきちんと尋ねなかったことが悔やまれます。

…でも

…私にはきつと尋ねることなんてできなかった

「お嬢ちゃん、いいえリノ。あなたは『イケニエ』の意味を理解している？」

「…学校で聞いたことなら。たしか、誰か一人にすべて押し付けるようなそんな意味だったと」

「そう、そういつぶうに思っているのね。フッフ ああこの村は穏やかですものね。それにお嬢ちゃん、大事に育てられていそうだわ。ひもじいことが無いように 凍えることが無いように 酷い話は聞かせないように。親はそうやって子供を守ろうとするもの。」

リノはカツと頬が熱くなりました。

もちろんそれは怒りではなく羞恥のために。

「大切にされたことを恥じるのは可笑しいわ。幸福は恥じるものではないの。不幸を誇ることの方が何倍も醜悪なのだから」

赤い唇を微笑の形にとどめたまま、けれどその瞳は驚くほど真剣にアジェルは言葉をつづります。

「いつかわかるわ。それは考えているよりもずっと恐ろしいほど早く」

まっすぐリノを見つめているはずのその灰色の瞳 けれどなにも映してはいません。
なにも見てはいない

でももしかしたらすべて見えてしまっているような

怖いくらい澄んだ

灰色の瞳

『また お話しましよ。』

夢から覚めたように瞳の焦点を合わせるとアジェルは唐突にそう言い呆然とするリノを振り返りもせず去っていきました。

辺りはすっかり日が落ち 少し肌寒く感じました。

「遅かったじゃないかリノ。また遊んでいたのかい」

あきらかに不機嫌な様子の祖母がすっかり出来上がったスープをかき混ぜながら言います。

「まだ小さな女の子が暗くなっても家に帰らないなんて！恥ずかしいことだよ、わかっているのかい」

「近頃しょっちゅうじゃないか、悪い友達ができちゃいないだろうね」

…私は大事に大事に育てられた子供

…心配されて何不自由なく与えられて

…とても幸福な子供

「ごめんなさいおばあちゃん」

舞台

サーカスのテントは規模としてさほど大きなものではありません。けれども近隣の村や町からも見物客が訪れるのでそれなりに人は集まっていました。まるい舞台にはまだ薄暗い照明しか使われていません。客達は今か今かとはじまりを待っています。

ゴーン と低い音が響きました。舞台の端に立つ派手な服を着た女に一筋の強い照明があてられました。女はくつきりした笑顔で客に挨拶をすると高い声で司会を始めました。

「それでは今から我々最高のエンターテイメントを御覧いただきましょう、と その前に」

ここで司会の女は声のトーンを下げ作り物めいた神妙な面持ちで続けます。

「山奥の小さな村に我々が訪れた際、類稀な歌声を持つ天使のような姿をした少年を発見しました。しかしこの少年、実は不治の病を

患っており…ああ 大丈夫です、人にうつるものではありません
ここで女は一度にこりと笑った。

「そう、実はその少年はあと何年も生きることができないのです！」

女はここで言葉をくぎり少し肩を落とす仕草をする。

観客からは「まあ」とか「そんな」とか同情にみちた嘆息がもれる。

「しかしです、「広い世界を見てたい」という少年の最後の希望を
我がサーカスの団長が聞き入れ今その少年は我々の旅の仲間となり
サーカスに参加しているのです！皆様は本当に幸運です！命短き少
年が魂を削って紡ぐ至上の歌声どうぞご静聴くださいませ！！」

わあああああ

客席から割れる様な拍手が響く

目頭をハンカチでおさえた中年女性

興味深そうに首を伸ばす男

きやあきやあ嬉しそうに騒ぐ女

他人の不幸は自分の幸福を引き立たせます。

不幸な人を同情し「可哀想」と思える自分が優しいと思えます。

舞台袖で白い一枚布の民族衣装を着た少年はぼんやりと湧き立つ客席を見つめています。

…『命が短い』というのは間違っではないんだろっな

…でも、自分が死ぬのは

…『死んでしまう』のではなく『死ななくてはいけない』からだのに

簡易舞台から司会者退場

照明暗転（客席の拍手が弱まる）

小さな足音（客席静かにざわめく）

足音・舞台ほぼ中央にて静止（客席ささやき）

沈黙

暗転したままの舞台

弱い照明が当たる

白い服が浮きあがる

亜麻色の髪の少年

眩しげにまたたく（客席感嘆や再びささやき声）

沈黙

沈黙

沈黙

少年が静かに息を吸い込む

空白と静寂

空気に融けていたかのように
ゆるゆると声がうまれる

少しずつ少しずつ

静寂を浸していく

いつのまにかそれは旋律を帯びる声に静寂は沈黙し、そして屈する

声は単純な律をなぞり
けれど
空間をいつのまにか支配していく

か細く頼りなく耳を必死で澄まさなければ聞こえないと思われた小
さく静かな歌声が
数秒の間にサーカスのテント全体にずっと以前から聞こえていたか
のようにまるで違和感なく響きわたる

それは清水のように
それは淡い光のように

透명한歌声

声はするすると高音に昇り
音の波動としか聞き取れないような段階になって尚
それは耳に心地よく

その声はかすれることをしていない

客席は水をうつたように静まりかえっている
身動きひとつしない
瞬きすらきつと
忘れているのだろう

感情

濃紺の空に星が浮びます。

終わりの村は小さな村なので家々が密集している地区を一步離れればそこは闇です。

夜鳴き鳥の悲しげな啼や羽虫の囁き以外は聞こえてきません。

リノは一人寝床にもぐりこみ、ザワザワと落ち着かない気持ちを必死になだめていました。

夕方アジェルという女が言った言葉。

そしてフォアの諦めとも達観ともとれる微笑。

…どうして私はいつも無力なのだろう。

『小さな女の子』

そう言われるたびにその言葉の頼りない印象を意識していた。けれどもそのとおりだとも強く感じている。

『背筋をしゃんとのばして 目玉をえぐられても 前を見据えなさい』

…お母さん

…どうして私はこんなにも弱いのか？

布団をきつく握り
大きな瞳を見開き

しかしいつの間にかとろとろ眠へと誘われていく

目を閉じればいつだってそこは楽園だった

永遠の凧の刻

終わらない静寂

外はまだ賑わっています。
サーカスが閉演しても団員がまた別の商売をしていたりするからです。

フォーは小さなテントで毛布にくるまっています。

…寒い

昼はあんなにも暖かだったのにどうして夜はこんなに冷えるのです
よう？

それとも昼は一人ではなかったから？

同じ夜の下に同じように上掛けをきつく握りしめている少女がいる
ことをフォーは知りません。

…さむい

…さむいさむいさむい

まだ小さな手がそつとテントの床を撫でます。

そこに居た人を求めるように。

けれどもその動作の意味が本人にはわかってはいません。

「大丈夫 永遠ではないのだから」

無意識の呟き

床を撫でていた小さな手が今はかたく握り締められています。

「大丈夫」

…もう 眠ろう

目が覚めてすぐにヒトのことが気になるなんて今までなかった

心地良い朝日がまだ薄暗い部屋に差し込んで夢現の世界との狭間をさまよう意識を覚醒させます。

ベットから上半身だけ起き上がりぼんやりとした頭でリノはあのこの事を考えていました。

…コイとかアイだなんて、そんな感情ではないと思う

…だって私は

…まだ小さな子供だもの

それに男の子だとわかったのは昨日なのだ。

いくらなんでもレンアイカンジョウを持つには時間が足りなすぎる。

少し寝癖のついた金色の髪を無意識に弄る

…でも どうしてか少しだけ

…生きているのが幸福に感じる

桜色の小さな唇が微笑みの形になっていることをリノは知りません

『明日も来てくれる？』

初めてあのこがそう言ってくれたことがこんなにも嬉しいなんてことを、リノは自分でも気づかないのです。

まだ薄暗い部屋で朝日を受け輝く髪を弄ぶ少女は、ふれれば折れてしまいそうなほど華奢でしたが『大切』だと想うものが出来た今その瞬間から

どんな屈強な男よりも強い、もしかしたら神すら恐れる

そんな力を胸に宿しました

感情（後書き）

15話と16話はいつぺんに更新しました。

逢瀬

「おはよう」

まだ昼前なのにリノがテントに現れました。

フォーは驚き「えっ」と小さな声をあげぼかんとしています。

「今日は学校がお休みの日なの。あ…早すぎたかな？サーカスのお仕事があった？あの ごめんなさい」

途端 少女が不安にかられたようであつちむきます。

「ち ちがうよ、ううん。大丈夫今日はサーカスも休演日らしくて何も言われてない」

あわてて少年は否定し、そしてはにかむように微笑みました。

「おはよう、リノ」

今日も終わりの村は暖かく、空は隅々まで晴れわたっています。金色の髪をした少女が踊るような足取りで花畑を歩いています。隣には肩までのびた亜麻色の髪を無造作に風になびかせた少年とも少女ともつかない整った容姿をした子が穏やかな表情で辺りを眺め

ながら歩いていきます。

二人の前を白い素朴な蝶々が風にのるようにして飛んでいきました。二人の視線は自然とその蝶々が飛んでいた先を追います。白い蝶々が向かう雲一つな空は途方も無く大きくて

けれども

小さな者達を守るように包み込むようにただただ存在しているのでした。

「赤ちゃんに触ったことがないの？」

リノは空色の大きな瞳をまたたかせ思案する表情を浮かべました。

「シエラ…昨日遊んだ子よりも小さい子という意味？」

「ええと…シエラくらいの子も初めてだったけれど本当に小さい…あのまだ抱っこされているような…」

「ああ 首がすわっていないくらい小さい赤ちゃんね」

…首？

…人間は始め首が??

フォーは知らず、自分の首に触れていました。

「…生まれたての赤ちゃんは首がぐにゃぐにゃなの。支えてあげていないと後ろにガクンってなっちゃうの」

リノが赤ん坊を抱くしぐさをします。

「だから抱っこするときは気をつけないといけないって近所のおばさんが言っていたわ」

「知らなかった…」

赤ん坊とは本当に本当に弱い生き物らしい。

驚きを隠せぬまま呆然としているとリノが一人ごちる声が聞こえた。

「村に生まれたばかりの赤ちゃんいたかなあ…」

「ああ いいんだ、昨日シエラに会ったちょっと思いだしたただか
ら」

…赤ちゃんに触ってみたい

ちいさな 願い

「学校で聞いてみるね」

明るい調子でリノが言う。

「洋裁屋のお姉さんがお腹大っきかったけれど生まれるのは2・3ヶ月なんだって。フォーがずっとこの村にいられば抱っこできるのに」

「そうだね、でもそれは無理かも」

「……」

「……」

寂しそうにリノが微笑む

だから 微笑かえそうと努力してみるが

うまくできない

自分はきつとひどく滑稽な表情なのだろう。

チリリン

風が吹いた

「あっ」

持っていたバスケットの上に被せてあった白いハンカチが風に舞い上がりました。

バスケットをその場に置きリノは追いかけてます。

フォーは一瞬考えバスケットを拾い上げてから後を追いました。

リノの足を見ると自分がバスケットを持って走ったところで簡単に追いつけるのが一目瞭然だったので。

風に踊る白いハンカチ

それを一生懸命追う小さく華奢な少女
後ろから追いかける白い一枚布を纏った少年

終わり無くひろがる青空

風の音

チリン

チリリン

リン

ハンカチがゆれる 穏やかな表情をした木の枝で

「あ ……」

「ひっかかっちゃたね」

「うん、結構高い…」

その木は半分ほど葉を落としていましたが枝ぶりはしっかりしているように見えました。

「自分がとつてこようか？」

フォーは幹に手をかけます。

けれどリノはあわてて首を横にぶんぶん振り

「私が登る!」

とフォーを制しました。

「でも…」

フォーは困った顔で立ち尽くします。

正直、リノは運動神経がよさそうには見えません。

先刻走っていた姿や今なお息を切らしている様子を考えると「良くない」よりも「とてつもなく悪い」といった感じが否めません。

「私がとつてくるわ、だって私がとばしてしまっただんだもの」

リノは確かに、「いかにも女の子」といった姿で「いかにも女の子」といった事が得意です。

つまりそれ以外の「女の子だからいい」と大人が笑っていうような事（それは運動だったり虫が苦手だったり泣き虫だったり）はまず

すべてがダメでした。

…悔しい といつも思っていた

…まるでそれじゃ私は「女の子」のドーリス（理想）を目指しているみたいじゃない

そうじゃないのにそうじゃないのにそうじゃないのに

気持ちとは裏腹に、リノは自然にそうだったのです。

…だから 「とばしちゃったハンカチを男の子にとってきてもらう」なんて私は自分を許せない

そう 口にごそ出しませんでしたがリノは幹に足をかけました。

「気をつけて」

心配そうにフォーが手をかしてくれず。

「うん ごめんね」

…ごめんね、素直な女の子じゃなくて

…ごめんね、あなたに「ハンカチをとってくれた」「勇敢な少年」の

役をしてもらうことができなくて

それでもあっさりど、リノが木に登ることを承知してくれた少年を心底感謝しました。

これが村の男の子だったら無理にでも「おまえは女だからいいんだよ」とリノをおしのけたことでしょう。

強がり

意地っ張り

頑固

…やっぱり私はどうしようもなく「女の子」なのね

リノは木にしがみつきなから小さくため息を吐きました。

…大丈夫だろうか

危なっかしい手つきで弱弱しい足取りで

どう見ても慣れていないことをやっているであろう小さく華奢な少女。

…でも彼女は見た目からは考えられないほど
…激しく強い人間らしい

大人しくおどおどとした少女と
恐ろしい団長に怯みもせずに向き合った少女

…怪我をしないでほしい

この小さく華奢な少女が木の上から落ちてきたら、はたして自分に
受け止められるだけの力があるだろうか。

ざわざわざわざわ

リン

リン リン チリン
チリン

風がたまに強く ごわっと吹くのがたまらなく恐ろしく感じます。

大きな木と小さな子供
突き抜けるような青空
広がる草原

しっかりと見開かれた目に映る世界。

裸足の足の裏で踏みしめる草は少し水分を含んでいてやわらかくもなっています。

白い服の裾を絡める風はぬるく木の隙間から差し込む陽射しは温和でした。

けれどもそんな気持ちのいいすべても、頭上で危なっかしく動いている少女に気をとられている今は感じることもすらできないでいます。

…こわい

…人が目の前で危険にさらされているのは自分が危険である場合よりもずっとこわい

次の瞬間

次の瞬間こそ絶対に足を滑らして落ちるであろう瞬間をもつ何十回も見ているのは心臓によくありません。

自分が登っているわけではないのにフォーは背中に嫌な汗をかいていました。

…思っていたよりも高い

リノは一心にハンカチを目指して登っていましたが頭の片隅では「どう考えても危険」だと理解していました。手の平は汗ですべり枝を上手くつかめません。

…まずい、まずいまずいまずい

眉間にしわをよせ、けれど下で心配している少年に自身の不安を気取られぬようにできるだけ急ぎ登る。

それは無謀　という行為。

「リノッ」

短く　鋭い叫び

「え」

少女の身体が傾いだ瞬間

手を滑らせた少女よりも下から見ていた少年の方が早く気づきました。

ザワザワザワザワザワ

ザザザザザ

ザッ　ッザ　ザッ

半分ほど枝に残っていた葉がごそりと落ちてきました。

恐怖から叫ぶことができず軽い身体は枝に幾度もぶつかりながらまっすぐ少年の上に落ちていきました。

…無理だ

リノが落ちてくる瞬間フォーはとっさに手を広げましたが、二人の体格にさほど違いはないのです。

…自分では支えきれない。

自分は絶望的に無力

白い一枚布からむき出しになっている細い腕
ともすると立っていることが精一杯といった様子
の枝のような両の足

『ゆっくり大きくおなり』

…でも 自分は

…今こんなにも子供の身体が憎い

リノはそつと目をあげ、顔の前で組んでいた腕をどけました。
足や腕があちこち痛みますが擦り傷程度ですんだらしく手も足も動きません。

少年の短い叫び声を聞いてから頭が真っ白になってすぐにきつく目を閉じてしまったので地面にいる今もまだ少し混乱しています。

「…大丈夫？」

小さな声が

身体の下から

「つつつ!!!!!!?」

反射的に飛びのくと流石にあちこち痛みましたがそんなことはまったく気になりませんでした。

「フォー?!」

…無理だ

そう結論に達した次の瞬間フォーはリノを受け止めることはあきらめました。

その代わりに自分の身体を使って衝撃を殺すことにしたのです。

「ごめん ごめんねフォー私がフォーの真上に落ちてしまったのね？ああ ああああああ…私が意地をはったから私が自分の愚かさを見とめなかったから…っ！！」

動揺からか少女は早口に謝罪と自責の呪詛を唱え仰向けに倒れている少年の肩を揺さぶりました。

「…リノ、ごめん痛い…」

ほぼ半狂乱の状態のリノとは対照的に少年は小さな声で申し訳なさそうに呟きました。

「え？あ ご ごめんなさい！！腰うつたの？私の上に落ちてきたから骨が折れたの？！ど どうしようどうしよう…ごめんなさい私が重いからっ」

リノがあわてて手を離すと意外にも少年はさほど苦しむことも無く起き上がりました。

「そんなことないよ、思っていたよりも衝撃が無かった。おそらく枝がなくなって助けてくれたのかも。」

「どこか痛まない？」

「うん、たいしたことはないから大丈夫。リノも平気？受け止めら

れなくごめんね」

「そんなこと…!」

チリン チリン

チリリン リン

風がまたごわつと吹きました。

「「あっ」「」

木にひっかかっていた白いハンカチがひいらり 二人の足元に落ちてきました。

逢瀬（後書き）

1ストーリーなのでまとめて更新

夜

その夜。

隙間風のもれる簡素なテントの中で横になり、ぶつけた箇所痛み
に少し顔をゆがめました。

…でも本当に、思ったほど衝撃をうけなかった

普通上から落ちてきた人間を受ける下の人間はそうとう負担がかか
るはずです。

けれどもフォーは流石に打ち身などであちこち痛みますが、大事に
はいたらなかったのが不思議でした。

リノはひどく華奢な少女なのでそれが功となったのかもしれない
し、それに少女というものはなぜかとてもやわらかな生き物なので
す。

抱きしめたら折れてしまいそうな
強くつかんだらくずれてしまいそうな

なんとか身体が痛まない姿勢を見つけると小さくため息をつき、そ
してそっと白いハンカチを握りました。

「助けてくれてありがとう、本当に……。もしフォーがあぶない時は必ず私が助けるわ。」

昼間、リノは少し涙ぐみながら少し震えながら何度も何度も言いました。

そして

「もう、風で落ちてくるならもっと早く落ちてくれればよかったのに！あ そうだ、お礼に今日のおやつはフォーにいつこ多くあげるね！」

と白いハンカチを強く握りやっとな小さく微笑みました。

ハンカチは枝にひっかかった時に破けたのか端が切れていました。

「リノ、お菓子はちゃんと半分でいいからそのハンカチよかったらもらえない？」

フォーはその時ほんとうに突然、けれどもそれはほんとうに初めて人に、リストム以外の人間に願いを伝えました。

リノはちよつと驚いた顔をして、しかしすぐにハンカチを手ではたき綺麗にたたみ

フォーに差し出しました。

明かりのない暗いテントの中でそっと握った白いハンカチ。
冬の訪れを日に日に感じるこの季節ですがどうしてか昨夜よりも温
かいように感じるのは…。

夜（後書き）

ちよつと短かつたので続けて更新

変化

朝がちつぽけな世界に広がります。

家々から朝独特の匂いがしだし時間を問わず元気のよい子供達の声が聞こえます。

朝は村人にとっていつも新しいものです。

眠りにつき目覚めるといつでもそこにあるものです。

けれどもサーカスの舞台用テント横にある小さめのプレハブから眉間に皺を寄せ出てきた女にとって、朝とは夜の続きでありました。

あんなにも奥ゆかしい夜が、どの瞬間からこんなはずとしく遠慮の無い朝に変わってしまうのだろうか。

灰色の瞳を細めほつれかかった襟足の後れ毛をかきあげます。

「なんだって朝はいつもあたしに敵意をむくのかしら」

「あたしが夜の住人なのはあたしのせいではないのに」

まるで子供のように女は眩みます。
光が強くなっていく太陽を浴びると身体中からアルコールが蒸発し
ていきそうに恐ろしく感じました。

重い頭を軽く振り、視線を前方に投げると「あの少年」がひどくつ
らそうな様子で歩いていました。

「ぼつちやも二日酔い？」

甘いようできてどこか低めのわざと軽薄に聞こえるよう発したよう
な声。

「あ」

サーカスの中でフォーに声をかけてくる人間は極少数です。
その中でも異彩をはなっている人間。

「んふふ 歌姫が酒飲むわけないわね。 どしたの、辛そうじゃな
い」

灰色の瞳を細め朝の光をさえぎる為か手のひらをひさし代わりに額にあてています。

容姿に優れた人間を集めているサーカスの中でもとりわけ美しい美貌を誇る女。

けれども舞台にはあがらない。

初めて会った時彼女はあの気だるげでいてすべてを達観してしまつたような口調で、また少し楽しげに言つた。

『あたしはハル売りのアジェルよ』

その意味をフォーは知っていた。

恐らくアジェルもわかつていて教えたのだらう。

舞台には出ない女優

演じるのは大金を支払つただ一人の為

毎夜毎夜かわるがわる偽りの睦言

褥の御伽草子

…今朝は身体の痛みで目が覚めた

…背中や手足の関節がメキメキ音を出すように痛む

…昨日の打ち所が不味かつたのかもしれない

その場ではそんな痛みはなかったのですが、次の日急に痛みだすこともあります。

「身体が…痛くて」

「あら、ころんだの？どこ痛いなのよ」

アジェルがフォーの身体をじろじろと眺めます。

「怪我してるわけじゃないわよねえ？」

「う…ん…、昨日木から落ちてきて…」

フォーが言葉を濁すとアジェルは怪訝な表情で尋ねます。

「『落ちてきて』？『落ちた』じゃないってことね？落ちてきたものを下で受け止めたってことかしら」

「…受け止められなかったけれど」

恥じたように顔を背ける少年を真面目に一瞬見つめると二日酔いの女はケタケタ笑い出しました。

「アハハハ なあに坊や、もしかして金髪のお嬢ちゃんか木の上からぶつてきたの？そりゃ無理よ、どう考えたって無理無ー理！」

「……………」

「で？身体痛いのお？でも変ね打ち身にもなっていないじゃない…どの辺痛いの？」

「足とか背中…膝の辺りが…」

「ふうん…」

女は左手を口元にあて考え込むように首を傾げました。四本の指は長く、とても細く優美でした。

「もしかしてセイチョウツウじゃなあい？」

「…？」

「成長痛、別名オスグッドとも言つものよ。普通夜足の関節が痛み次の日はケロつと治るとか成長期に運動をしすぎるとなるとか…色々言われているけれど発育期特有の痛みで骨の成長に筋肉の成長が伴わない時におこるみたい。ま 急激に背が伸びたりする前兆ってカシジ」

あんまり詳しく知らないけどね、と首を傾げたまま呟きました。

それは嘘だろうなと確信しつつフォーは頷きます。アジェルは恐らく、見た目どりの人間ではない。

医学に詳しいのかはわからないけれどもフォーやサーカスの人間、村人達が知りえぬ事を口に出さぬだけでその小さく形のよい頭の中に膨大な知識として納めてあるように感じた。

「ぼっや、大きくなりたいのね」

「え」

「今まで止めていた成長を一気に爆発させてまで大きくなりたいと思っただけでしょう？」

「…でも自分の意思で成長は」

「できるわ、あたりまえよ。人間は感情の生き物なのよ？強く想えば成長を止めるのも進めるのも出来て当然」

きっぱりと

それは彼女が口にするときも当然の事実であるように聞こえました。灰色の瞳は曇りなくフォーの翠色の瞳を見据えていました。

この手があと少し大きかったら

この身体がもう少し遅しかったら

誰かを支えてあげられるのだろうか

大人になれない自分には関係ないことだとあえて目を逸らしていた

のかもしれない
永遠に子供であるのが運命だと、大きくなるうとする身体すら騙し
ていたのかもしれない

「あんたはもつと強くなれるわ 坊や」

独り言のような囁き

助言とも予言ともつかぬ叙情詩^{セリフ}

ふと表情をくずしニヤリと唇の端をあげ笑う

「じゃあ もう寝るわ。金色のお嬢ちゃんによろしくね」

もし 自分が成長してしまつたら

あの大岩をこしてしまつたら

やっぱり

この身体はあの闇に消えるのだろうか

…自分がいなくなつたらリノは悲しんでくれるのだろうか

… 誰一人悲しんでくれる者などいないと思っていたから
… 少し嬉しいような気もする
… けれど

… あの大きな空色の瞳が潤むのは
… 想像するだけで息が苦しくなるほど辛い

ぎしぎしと痛みを訴える身体を無理やり動かしサーカス舞台の掃除を片付けます。

小さなテントに戻る途中、ふと上を見上げると薄い色の空が白い雲と溶けるように伸びていました。

あたりまえのことですがこの空はフォーの生まれた村にも繋がっているということymarで今発見したかのように少年は思い出しました。

血のつながりもない自分を愛してくれたあの老人の墓の上にもこの空は伸びているのです。

チリン チリリン

ハタハタ と服の裾をあおる風
亜麻色の髪があちこちに乱れ舞う

その小さな身体に覆いかぶさるように広がる薄い空
ぽつぽつと点在する簡易テント
ちいさな少年

チリン チリン

引き結ばれていた唇が離れすつと自然に息を吸う

そうしながらもまだ少年は自分の行動が理解しかねているようで
風に鳴る鈴の音を聞きながらゆっくり瞳を閉じる

…不思議

…どうして突然

…謳いたくなってしまうたのだろう

…鳥が謳うのは想いを伝える為

…言葉がない鳥は恋しいものに歌を贈る

そう教えてくれた人はもういない

教えてもらった時はその意味がよく理解できなかった。

『恋しいものに想いを伝える』

あの村で隔離された環境下に育った自分にはとうてい理解できるはずがなかった。

瞳を閉じたまま息を吐き出す。

そして同時に歌がうまれる。

フォーの知っている曲はとても少ない

だからその中でもできるだけ暖かい歌を謳う

言葉を知らぬ鳥のよじに

変化（後書き）

この後いつきに走ります

俯く子供

贄の子供が村の少女と遊んでいるのは歓迎すべき事態ではない。サーカスの団長は面倒なことになったといった表情で葉巻を押し消した。

「もう捨て時か」

あの少年はたしかに素晴らしい声をもっている。容姿も美しいので客の受けも良い。

村長からの強いクギがなければ得意客の酒席相手でもやらせたいほどなのだが。

大人しく扱いやすい子供だったがこの村にきて状況は変わった。村の権力者の娘があの子供に懸想してゐるのは火を見るよりも明らかだ、騒ぎ出すとやっかいである。

「捨て時だな」

もう一度そう呟くと団長はサラサラと手紙を書き始めた。

「どこへ行くんだ、リノ」

背筋がすっと冷たくなるような
首の後ろがズット重くなるような

自分以下の人間をしつかり区別して接する者独特の上から押さえつけるような低い声。

「おはようございます、父さん」

そうすることが自身を守る癖になってしまっているように俯いたまま上目遣いで相手を見る。

「最近よくでかけるようだね、どこへ行くんだ？」

どこへ のところをわざとゆっくり発音し、リノよりもずいぶん暗い色調の蒼をした瞳でおびえたように小さくなっている娘を射竦めるように見つめる。

「お友達のところへ…」

「言葉は最後まで言いなさい、リノ。」

「はい…。お友達のところへ行きます、父さん。」

リノの身体をひんやりとした空気が纏わりつき次の質問を全身で拒否します。
けれども

「誰の、誰のところへ行くんだい？名前を言っところらん」

恐らく父はその答えをすでに知っているのです。

リノがどんなに注意をはらって隠し事をしても、この村で生きているということは父の手のひらの上で生きているということなのでした。

そしてどう考えても父はサーカスの人間である少年と『自分の娘』であるリノが仲良く遊んでいることを許す人間ではないのです。

…ああ

…ああ　ああ　どうして

…私には反抗するような力も立ち向かう勇氣もまっすぐ前を見据えることすらも

思い通りになることなんて　ちっともなかった

「嬉しい」の後にくる「哀しい」が怖くて「嬉しい」も怖くなった

手を繋ぐのが怖いのは

手を離される瞬間が怖いから

みんなは怖くない？

私だけが臆病？

大人になれば怖くない？

どうして世界はこんなにも恐ろしいの？
私が弱いから恐ろしく感じるの？

必死にせめて相手の姿を捉えていようと粘ったがやはり挫け、俯いてしまった。

何か言おうとして唇を動かすが言葉をのせることは出来そうもなかった。

「言えないのか？父さんに名前を言えないような子なのか？やましいことがあるから下を向くんだろ？」

…違う 違う違う

…やましいことなんてなくても弱い者は俯く

…わかってもらえない時 絶叫したい時 寂しい時 悔しい時 消えてしまいたい時

…口に出してはつきり意思を伝えられる人間の半数以上は口に出して意思を伝えない人間の気持ちを理解しない「出来ない」んじゃない
く 「しない」

途切れ途切れに息を吐く。

絶対の命令を下す君主のように、父はリノを眺める。
見つめるといふよりも 眺める。

「…友達、ちょっと前に来たサーカスの…サーカスで歌を歌ってた

子で…フォー…っていつてやさしい子なの…」

それだけいうのに全速力で走り回ったくらい息を切らし握ったこぶしは白く、先刻から凝視している床には穴があきそうでした。

白い鳩

…どうしたんだろう？

もう夕方近くになるのにリノがテントに顔を出しません。

…もしかして昨日打ち所が悪かったのだろうか

考えただけで顔から血の気が失せます。

自身の身体もギシギシと痛みますが、それよりももしリノが苦しんでいるとしたらそれは受け止められなかった自分がいけないのだと

ざっ

っと音をたてて風がテントの垂れ布を捲り上げて通り過ぎました。

チリリン チリリン

呼吸と変わらなくなるほど聞いているはずの鈴がいやに大きく鳴りました。

フォーはゆっくり呼吸を繰り返します。

少女と初めてこの場所で会った時そうしていたように身体をまるめ両膝を抱き入り口を見つめています。

世界が終わるときはきつと何の前触れも無く、じくあっさりと終わるのではないだろうか。

だからきつと

幸せが終わる瞬間だってきつとゆるゆると水が水に混ざるように

…でも 終わりの前にこれだけ幸福だったのなら

…今までのすべての悲しみを悔やんだりしない

白い鳩が薄い夕焼け色の空を往く
足に括り付けられた手紙

恐らくそれは小さき者達の運命を動かす

何が正しいかなんて本当はわからないしわかったとしても意味はない
結論は常に後付でしかないしそれは大きな意味であきらめともいう
ただそれだけを本能ではみんなわかっていた
ただ それだけを

くるしいくるしいくるしい

「苦しいよ」

呟きよりも囁きよりも小さな声で少女は嘆く。

どうしてか涙すら流れることをしない。

自分が無力であることなんて物心付く前からわかっていたのにそれがこんなにもこんなにも哀しい。

反発なんてできるはずがなかった

できないように育てられた

それでもそれでもそれでも

なにか大変なことがおこるような胸騒ぎ

背中にいやな汗がつつたう

暖かな部屋の中にいるのにガクガクと震えが止まらない

…きつと今日を境に何かが変わる

…しかもそれは恐らく

…良くない方向に

物語が動きだす

恐ろしく勢いをつけ坂を下るように

築き上げてきた小石を大波がさらうように

変わらない事を嘆くなんて愚かだ

本当は変わらないでいることなんてできやしないのだから

ちっぽけな世界のとりわけちっぽけな村

村長をはじめ村の大年寄りや神仕えの者達がひっそりと旅に出る。

目指す場所は終わりの場所

目的は…

「神が自分の為…」

誰にも聞こえぬようにそっと呟く。

深い夜だが眠りが訪れず翠の瞳は開かれている。

少女が言った言葉、その言葉の意味をぼんやりと考えるが身体の痛みからか思考は途切れる。

たった一日会わなかっただけでどうしてこんなに寂しいんだろう。

…寂しい？

…ああ 寂しいなんて思ったのは

…あの人が死んだとき以来だった

やわらかい金色の髪 透けるように白い肌

強く触れると折れてしまいそうに細い小さな身体

時折弱弱しく翳りけれどもふいにとてつもなく激しく強い

大きな空色の瞳

こんな感情を知ることなんてなく消えると思っていた

リストムが話してくれたように彼が『本物の天使』に抱いた感情

きつと同じだったはず

チリン

右手で軽く額に触れる

左手には白いハンカチ

…ああ

…もしかして自分は

∴生まれてきて幸せだったのかもしれない

決意

夜明けを待たずにそのものたちは村に入る

全員が全員白いフードを目深にかぶり表情は読めない
彼らは自分達を信じている

自分達の神を『本当に』信じているのだ

愚かなほど 純粹に

「次の満月の夜だ」

久しぶりに会った少年に村長は簡潔に伝えた。

少年は何も答えない。

その瞳には何の感情もないように見える。

村長はそんな少年を少し恐ろしく感じたが、それを悟られぬよう皮肉めいた口調で続けた。

「この村の娘と知り合いになったそうだな。その綺麗な顔でひっかけたんだろ？それとも娘が勝手によつてきたのか？油断もすきない子供だ。それとも最後の火遊びのつもりだったか？」

少年は 何も答ええない。

村長の横に立っていたサーカスの団長が下卑た笑いを浮かべながら口を挟む。

「心配は無用でしょう、娘といつてもまだ子供ですよ。何にもしちゃいないでしょう、ええ 旦那が心配しているようなことは何にもね。なあ フォー、金髪の可愛いお嬢さんだったなあ。」

少年はやはり何も答ええない。

ただ、食い縛っていたらしい唇から赤い血が滲んでいた。

…フォーはずっと村にいるわけではない

…サーカスがいなくなれば逢えなくなる

そんなことははじめからわかっていた事のはずだ。

けれどもリノはそれが嫌だった。

『嫌だ』だなんてまるで本当に小さな子供の、それも聞き分けのよくない困った子供のようない分。

でもそれ以外はなにをどう言葉にしたらいいかわからない

…フォーはサーカスがそんなに好きじゃないみたいだった

…あそこにいるのがフォーの幸せだとは思えない

けれども子供である自分達には勝手に生きていくことができない

…でもフォーはサーカスで旅をしているうちに

…やさしい人達に養子に望まれて幸せになるかもしれない

ふと そんな考えがリノの頭をよぎります。

リノはフォーに逢えなくなるのが酷く寂しく感じていますが、フォーもそう思っているかはわかりません。

「私は結局なにもわからないのね」

少女が自嘲気味に呟いた時、部屋の窓にコツコツと小石がぶつつけられている事に気がつきました。

「さあ 終わりの始まりよ」

リノが窓に近づくなり唐突になげられた言葉。

「え？」

ぞわり

その言葉は何故か途方も無い恐怖をリノに与えました。

「この言葉」が始まりの合図であるように、これから起こる物語の最初の言葉

目の前が真っ赤になりそしてすぐに真っ白になる

「まって！それはどういうこと?!」

感情に任せて声を荒げると同時にカーテンをめくるのももどかしく窓を開ける

「すべてを失ってもいいのなら　すべてを捧げてもいいのなら　話してあげるわ、お嬢ちゃん」

まっすぐ見つめる灰色の瞳

くつきりと　それでいて嫣然と微笑む

胸の下で組まれた細い腕

形の良い細い指

存在しないからこそ美しい左手の小指

窓から外に出るなんて初めてだった。

祖母に見つかつたらそれこそ「女の子がなんてはしたないことを！」とひどく叱られたことでしょう。

村はまだ半分以上眠っているらしく、しんとしています。

少し前を美しい姿勢で歩く女性に沢山の疑問を投げかけたのですが、今はまだ口をひらく時ではないとリノは空気として感じとり沈黙を守り後を追います。

どれくらい歩いたでしょう。

朝露に肌が濡れ靴が湿っています。

アジェルがひたと立ち止まったその場所は『終わり』へと続く道の手前でした。

彼女の前には一本の細い道が続いています。

子供には少し急な坂道ではありますが上れないことはなといったところですよ。

「ねえ リノ、『運命』を信じる？」

唐突にそんなことを聞いてきたアジェルに、けれどもリノはどうしてか躊躇なく答えました。

「信じない」

「ねえ リノ。『神』を信じる？」

「信じる必要なんてないわ」

フフフ

とアジェルは低く笑いました。

そしてそのまままるで独り言のように平坦な口調でほろりと言葉を

こぼしました。

「問うわ」

「あの少年、フォーが生贄としてこの『終わり』に放り込まれるとしたら。リノ、あなたに何ができる？」

…イケニエ

イケニエイケニエイケニエイケニエイケニエイケニエ

その言葉は以前聞いた時よりも深くリノに突き刺さります

『自分は神のモノなんだ』そう呟いた少年の横顔

「フォーが生贄として『終わり』に…」

焦点の定まらない瞳をしたままりノは崩れるようにしゃがみこみま
した。

…なんで？

…なんでフォーが生贄として死ぬ必要があるの？

それが一番に考えた疑問

…なんで？

…フォーが死んでしまったら他の人間が生きている意味なんてない

じゃない？

それはリノの純粹な疑問

「占い師が言ったそうよ、あの坊やが『終わり』に飛び込まないと世界が終わるとかなんとか」

物騒な言葉とは裏腹にアジエルはやわらかく微笑んでいた。まるで世間話をするような気軽さで。

「…止めることはできないの？」

しゃがみこんだまま少女は絞り出すようなくぐもった声で呻きました。

アジエルは媚態を感じさせるほどの完璧さで首を傾げ、さも当たり前のように言い放ちました。

「か弱く愛らしい天使のような金色のお嬢ちゃん。その透けるように白く折れそくに細い腕でその優しく甘やかに囁くような声でその弱く脆く叫ぶことすら耐えられない心で何ができるっていつの？」

真実の言葉はときに悪意ある戯言よりも深く胸をえぐる

俯いた瞳に地面を翔る鳥の影
暁を覚えた空を見ずとも大きな鳥のそれだとわかる

…人は無力だ

途方も無くそう思う

…この空を飛べたら

…私はすっかり地面を踏めるんだろうか

「奇跡なんて起こりはしないの」

謳うように穏やかな口調で女が囁く
絶望を招くように

「そうね」

喘ぐように少女が答える
伏せた瞳に長い睫毛の影
けれどもそれはゆっくりとひらかれる
明るい空色の瞳はしかし今は銀色をしている

「奇跡なんて起こらない、ただ跪いて祈っていても、裂けるほど想
っていて。でも、私には確信があるの」

今はもう俯いてはいない。
その表情にはあどけなさが消え、ただただ透明な空を映す瞳がすべてを語っている

「確信？」

微笑みを止め表情の読めない白い顔で女は低く問う

その問いを聞いているのかすらわからない様子の少女は、硝子玉のような瞳をしたまま言葉を紡ぐ

「確かなことなんて何一つ無いと私はこの短い人生で学んだけれど、例外があつたの」

女が怪訝な表情を浮かべる、しかし口を挟まず続きを待つ

すると突然少女は柔らかく笑う

「そしてもう一つ学んだことは人生は例外にあふれている ということ」

決意（後書き）

この辺は直そうと思ってる。もっと意味が通るように、意味のある運びになるように。

13 番目の月

千切れそうな絶望

発狂してしまいそうな孤独

そんな胸を深く抉る感情を風に撫でられたように微笑う

鈴の音を纏った少年

運命なんて逃げはつかわない

けれど偶然なんて陳腐なものじゃない

私がこの世界にいてあなたがこの世界にいた

ただそれだけ

それだけで十分だったんでしょ？

私たちは互いを知らない

逢っていた時間は決して長いものではない

でも だからなんだというの？

何十年何百年一緒にいたら本当に数日の逢瀬では偽物？

いいえ

だって私には確信があるわ

この世界でこの瞬間に生きているのは
あなたに逢うためであるのだと

どれくらいの時を無言でいたのかは定かではない。
眠たげな鳥の声が憤み深く聴こえる。

「『終わり』を見ていく？」

先刻の様子を微塵も感じさせない明るい声でアジェルが屈託無く尋ねる。

「うっん、昔母さんと見に来たことがあるから。」

リノは小さく肩をすくめ「哀しい場所だった」と呟いた。

村へ戻る道すがらアジェルは乾いた咳を繰り返していた。

「具合が悪いの？朝は冷えるのに…大丈夫？」

心配げにリノが覗き込むとアジエルはいつものようにくつきりと微笑った。

「大丈夫よ。ただ身体はもうそろそろダメになるっただけのことだわ」

「?!」

それは大丈夫とはいわないのではないのだろうかと焦り、けれどもあまりにあっけらかんと答えられたのでリノは何と言ったらよいかわからず押し黙りました。

アジエルはそんなリノの様子を可笑しそうに眺め突然歌うように呟きました。

「天のお国に還るまで 夢を觀ましょか 永久の」

チリン チリンチリン

チリイ…ン

一睡もせぬまま月が消えていくのを見ていた

ほんの少しだけ欠けた月

欠けていく月ではなくみつる月だ

…満月

恐らく今宵は13番目の月だろう

満つ月

蜜月

密月

ほんの短い時だったがやわらかな笑顔が鮮明に思い出せる

その笑顔が自分に向けられていて幸せだと感じていた瞬間を思い出せる

それだけで十分だと思った

刹那

「フォー」

囁くような声

けれど聞き違えるはずもないその声

チリン

古びたテントに風が通る

少年はすくりと立ち上がる

テントの入り口に垂れていた布が捲くれあがる

チリン

風が少年の頬を撫でる

亜麻色の髪が舞い深い翠色の瞳を細める

「リノ」

少年は、やはり囁くような声で相手に答える

金色の天使が記憶と寸分違わぬ笑顔で立っていたから

やわらかく微笑んだ少女は手を伸ばす

掴まなければいけないと想う者がその在るから

13 番目の月（後書き）

当初書いたものからかなりカットしてみました。

凧

村が殺気立っている。

大人たちが眉間に皺をよせて大きな声をだすので小さな子供達はわけもわからず怯えてしまう。

女達は忙しなく歩き回り、あちこちで固まっては休み無く口を動かしているし男達は不機嫌さを隠そうともしない

「なんだってそんな面倒を持ち込むんだ！」

「問題はなかったはずだ、この村の娘がたぶらかしさえしなけりやな」

「それはこっちのセリフだ！」

「だいたいこの村はちゃんと村役の機能があるのかすら怪しいじゃないか！田舎だからって寝ず番を置かないなんてまぬけもいいとこだ」

「なんだと?!流れ者が言いたい放題言いやがってっ!!」

「とにかく居なくなっただ子供を早く捕まえてくれ!もう期限が迫っているんだっ!!」

最後の悲鳴の混じった声で一同は声の主を見遣った。

白いローブを羽織った中年の男の表情は鬼気迫るものだった。

「生贄が逃げてしまった…大変なことになった…」

焦点の合わない瞳が
ガクガクと震える足が

尋常でないことを「終わりの村」の人間達にも否応無く見て取れる。

「…どういうことだ？サーカスの子供がリノと一緒に居なくなったのはたしかに一大事だ。だが生贄とは何の話だ？そしておまえさんはサーカスの人間ではないのか？昨日までは見かけなかったようだが…」

不穏な空気を察したのか、その場で萎縮していた子供が数人低く泣き出した。

211

「風が目に見えるわ」

草が波のように揺れるので辺りは海のようにだった

リィ リィ リィ

と微かな虫の声以外は何も聞こえなくてなんだか不安になってしまう

「静かだね」

隣を歩く少年もそう思っていたらしく声をひそめて呟く

こんなにも静かで

こんなにも凧いでいると

こんなにもちつぽけな私達なんて突然かすれて消えてしまいそう

…そうだったらしいのに

と 隣で少年が微かに咳をする

つい先刻アジェルが笑いながら言ったセリフを思い出し不安にかられ声をかける

「大丈夫?…具合が悪いの?」

「違うよ、大丈夫。」

それでも少女は不安そうに繋いだ手に力をこめる
今にも少年がかすれて消えるのではないかと本気で心配しているよ
うだ

…声のかすれに気が付いたのは村長が来た前の晩

…サーカスの舞台上
…いつもはなんでもない高音域

「フォー、背が伸びた？」

少しして少女が驚いたように言う
前回会ってからそう日がたっていないのに と呟く

「骨が軋むくらいは」

そういつて少年は苦笑する
それでも同じ年頃の子達よりはずいぶん小さいけれど

「どこに行こうか」

「どこにでも」

…けれども二人は知っている
…どこにも行けないことを

とても静かだ

虫の声と風の音

本当は鈴の音もするのだけれど

耳に慣れたその音は二人にはもうしないのも同じだ

押し潰されそうな哀しみを我慢するのと同じように

それぞれの思い

たった一人

親も兄弟もない子供を殺す

誰が悲しむわけではない

生贄にしなければこの世界が崩れてしまいかもしれない

これは占いだから 馬鹿げていると言う者もいるかもしれない
けれども私達はこの占いを信じてきた

災いが起きると言われれば それを防ぐ為に言われたようにしてきた
では嘘かもしれないから生贄なんぞださなくともよいと思われるか？
では嘘ではなかったら？

215

私達はいつだって信じて実行してきた
だから占いが外れたという結果を見ていない
実際私達の村は大きな災いに見舞われたことはない

嘘か真実か

わからないのなら最善をつくそうと考えるのはそんなに奇妙しなこ
とだろうか？

たった一人の子供を世界とくらべられるか？
生贄に差し出さず災いが起こってしまったら？

世界が終わってしまったら？

子供ではなく自己犠牲に溢れる老人を生贄にしたらだと？

それでは駄目なんだ占いでは子供を指定している

あの少年ではなくてはいけない

あの少年を殺さなければ

生贄に

さあ 生贄を探さなくては

「フォー、歌を…歌を聞かせてくれる？」

「え」

「あの…あのね、初めて会った時に広場でフォーが歌っていたのを聞いていたの。でも…それから一回も私聞いてなくて…よかったらもう一度聞かせてほしくて…。あ 嫌ならいいの！お仕事で歌ったのにお願いしちゃ駄目だったかなただすごく上手だったから…」

もう一度聞きたいなあ と最後は小さく消えるような声で、おろお

ると赤面して俯いてしまう。

素足で踏む草は柔らかく 声さえ溶けるように静かな草原

逃げられぬ場所から逃げている まるで小さな空白の時間

神が見落としているかのような瞬間

ただ仲良く手を繋いで歩いている二人を咎め

永遠に別つ事をしようとする沢山の人間

泣きじゃくって「どうして？」と叫んでも大きな力には歯が立たないこと

小さな声があまりにも無力なこと

二人はちゃんと理解っている

だから今泣くことはしない

歩いているのは逃げ切れれると思っただけではなく

立ち止まらない為

少年は今では自然になった微笑みを浮かべ小さく息を吸い込み

そして旋律を紡ぐ

それぞれの思い（後書き）

短いので連続投稿

昔々の伝承歌

たった一人の人間が伴奏もなく歌っているだけなのに
周りの空気が変わる

大きな声ではなく　むしろ囁きに似ているそれは
しかしまるで静かな湖に落ちた一粒の雫のように波紋を広げいつし
か波へと変わる

その声は人間の身体にも沁みこんでいく
抵抗はできない

爪先から髪の毛の芯まで

気づけば歌に、声の旋律に飲み込まれている

カタチがない分それは不可侵
恐怖であり悦楽

そこに在るのに存在はしない

歌いながら歩く少年の表情はやわらかい
舞台上で歌う時のような悲壮感や孤独はなく
瞳を軽く閉じるようにやや下を向き
隣を歩く少女に歩幅を合わせながらゆっくりと進む

歌は歌詞の内容は少しずつ違えどどの村にも伝わる有名な伝承曲

単純な旋律

素朴な歌詞

小さな恋人達の物語

少年の歌う歌詞は各地の歌詞が混ざっており、またところどころ不思議な歌唱法が見られる。恐らくこれは各地を巡業した際に聞き覚えたので地方独自の歌詞や歌唱法が混ざっている為だと思われる。

この歌は作詞者・作曲者共に不明。

*

昔々のお話です

銀色に光る鱗をもった 空を泳ぐ獣がおりました
恐ろしい姿の獣は いつも一人でした

ある日獣は一人の少女に会いました

少女は獣の銀色の鱗を褒めました

獣は少女に恋をしました

いつだってそばにいるから

そらをかけて きみにあいに

*

昔々のお話です

獣は毎晩少女を想い 悩んだ末に決めました
銀の鱗氷霧の牙 その全てを捨てること

母なる月に祈りを捧げます
空を統べる力を捨てるため
ヒトへと姿を変えるため

いつだってそばにいるから
そらをかけて きみにあいに

*

昔々のお話です

ヒトへと転じた獣が村へ 少女に会いに行きました
しかしそこに少女はおらず 風の爪がありました

凜猛な風が村を呑み少女を攫う
小さな少女は空に舞う
救うすべがなかったと

いつだってそばにいるから
そらをかけて きみにあいに

*

昔々のお話です

飛べない獣は空を見ます ヒトはなんて無力でしょう
哀しい獣は気づきます ヒトは涙を流すこと

獣であつたなら救えたものを
どこまでも飛び少女を見つけ
凜猛な風を消し去ることも

いつだってそばにいるから
そらをかけて きみにあいに

*

昔々のお話です
ヒトから獣に戻る為 獣は月に祈ります
全てをかけてヒトになり 全てを戻すことは出来ぬこと

己の命を引き換えに
獣は一日限りの獣へと変わる
恐ろしい姿の獣は 銀の鱗を閃かせる

いつだってそばにいるから
そらをかけて きみにあいに

そらをかけて

*

「その歌。昔お母さんがよく歌ってくれたの」

少女が懐かしそうに、そして少し寂しそうに呟きました。

「優しい銀色の獣に会ってみたいなって思ってた」

「この歌が好きだった？」

少年が尋ねると少女はふわりと微笑んだ。

「うん、哀しい歌だけれど。……あれ……？この歌はこれで終わりだった？」

つづきがなかった？

少女はなにかひっかつかたものを思い出そうと眉を寄せました。

少年はこの歌が哀しい歌だと思っていなかった。少年は少し驚きました。一人ぼっちだった銀色の獣が少女の為にできることを精一杯して恐らく少女は助かったことでしょう。

大好きなヒトを助けることができたらそれはきっと幸せであったのだろうと。

小さな疑問が二人の中に残ります。

14 番目の月

2人はあてもなく歩いてはいましたが、少なくとも大人達に見つか
らない道を選んでいました。

リノは村の周辺を知ってはいますが外遊びが好きな子供ではありま
せんでしたので、大人達が知らない道を知っているわけではありま
せんでした。

「日が暮れてきたら動かない方がいいと思うわ」

リノは以前近くの森で獣に人が襲われたと聞いた事を懸念し伝えま
した。

「そうだね、火を焚いて歩けば見つかってしまう」

大人達の搜索網は村周辺の森を拠点としているようです。
子供が考えるであろう「村からはなれた場所」。

その搜索のかがり火を見下ろしフォーとリノは静かに座ってしまし
た。

そこは『終わり』へと続く一本道の入り口。

「ここには探しに来ないのね」

「近づくはずがないと思っているんだらうね」

仰ぎ見た空には14番目の月。
紺碧の海にほかりと浮かんでいました。

一日中歩いたのに二人はさほど空腹を覚えてはいなかった。
小川で水分は補えたしこの村は比較的穏やかな気候に恵まれている
ので深刻な問題はなかった。

二人は村のやんちゃな子供達がよく遊んでいる村からかなり離れた
小屋に身を潜めることにした。
それは「終わり」に続く一本道を少し外れた場所にあり以前は人が
住んでいたらしいのだが、今は「終わり」を見に来る観光客の急な
雨宿り場になっていているらしい。

長く使われていなかったのかとところどころ天井に穴が開いているし
隙間風もはいるが、それでも屋根があり床がある場所は二人を安心
させた。

丸めて隅にほおられていた布切れを床にひき座り込むとリノは気が
抜けたのか壁に背をあずけ目を閉じた。
フォーは小さく切り取られ窓になっている場所から白い月を見つめ
ていた。

「フォー」

目を閉じていたリノがふいに言葉を発したのでフォーは驚き振り向きました。

「いつか小さな赤ちゃんを抱っこしてみたいって言っていたよね？」

「うん？」

柔らかい草の上で小さなシエラをあやした記憶。
子供特有の甘く熱っぽい小さな手。

「いつか私がフォーの赤ちゃんを産んであげる」

「え」

「そうすれば沢山沢山赤ちゃん抱っこできるでしょ？」

素晴らしい事を思いついたというようにリノはとても誇らしげにに
微笑ました。

小さな小さな赤ちゃん

もしも自分が大人になれば

もしもリノが自分と生きてくれたら

もしもリノが自分の子供を産んでくれたら

家族ができて 一緒に歳をとれたら

どんなに どんなに幸福なんだろう

それはあまりに途方もなくてフォーには想像が出来ない

そんな考えただけでも涙が出そうになるくらいの幸せを想ってしま
うなんて

望みをもつことなんてなかった

強い願望で胸が絞めつけられることなんてなかった

「そうならいい」

そんなこと そんなこと考えられるはずがなかった

幸福を願った後の絶望は途方も無い

その望みは絶対に叶わないと理解している

それは本当に、本当に本当に…

辛い

けれど今はただ微笑む

幸福を見せてくれた目の前の少女に

「うん」

小さくありがとつと呟きながら

気を張っていたのと歩き疲れたからか、リノはそのあとすぐに静かな寝息をたてはじめました。

小さな窓からもれる月光は思いのほか明るく金色の髪を照らしていました。

フォーはそつと少女のそばにしゃがみ 躊躇いながら手をのばしました。

やわらかい髪

髪より幾分濃い色をした睫毛は影をつくるほど長い
折れそつに細く、透けるように白い肌

少女が起きている時はこんなにまじまじとは見れなかったのですが

今は、忘れないように

どうしても記憶に焼き付けたくて

脆くて強靱で愛らしい天使のような少女

知らず、微笑みを浮かべている。

ふいに風が鳴った。

敏感に身を起こし耳を澄ます。

草を踏む人間の足音を聞き身を硬くして息を殺す。

小屋の前でその足音は止まった。

…見つかったか

けれどもその足音は一人。

仲間を呼ぶ気配もない。

チリン チリン

ハッとして自身を見遣る

両手足の鈴が鳴る

それをこれほどまで恨めしく思ったことは無い

「そこにいるんでしょう？」

楽しい女の声が静かな夜を裂く

14番目の月(後書き)

勢いで書いてるので文章が「ですます調」から変わってしまった…。でも勢いが消えそうだったので修正もせずにアップ。

意味

少女を起こさないようにそつと外に出ると闇が恐ろしく似合う女が立っていた。

「自分を連れ戻しに来たの？」

「そうだと云ったら？」

ウフフと赤い唇をあげて笑う。

少年の沈黙を憐れんでいるかのように。

「あたしは味方だっと思っていただけなの？坊や」

フォーは考える、アジェルという人間の事を。
サーカスでは数少ない自分を疎まなかった人間。
敵意は感じなかった、けれどそれは親しみも。

「けれど、他の人間を連れては来なかった」

何故？とフォーはまっすぐ女を見据える。

「あたりまえでしょう？あの連中は無粋なもの。小さな恋人達の逢瀬なんて爪の先ほど無理できないわ。それにあたしは坊やに伝えなくちゃいけないの」

伝える？そうフォーが尋ねるよりも早く女は言葉を続ける。

「『終わりの始まり』」

そうしてまた艶やかに笑う。

赤い唇

暗い闇

まあるい月

鈴の音

世界がどうなろうと かまわなかった
自分が生贄にならないことで世界が滅んだってどうでもよかった

自分が死んでしまえば本当に世界がまだ在るのかなんてわからないし
結局無くなってしまったって同じだ

けれど

けれどけれど

今は生きていて欲しい人がいるから

お日様の下で微笑んでいてほしい人がいるから

世界が無くなってしまうたら彼女は死んでしまうから

そんなのはいやだ

たとえこの身を八つ裂きにされたとしても

彼女が生きるこの世界が助かるのなら

世界が減びないように

それがどんなにあやふやで意味がない行為だったとしても

少しでもその可能性を回避できるのなら

誓となろう

この身を捧げよう

彼女が幸せに生きていける世界がありさえすれば

どうでもよかった

「『終わり』は何十年かに一度人間を飲み込むのもちろんそれは自殺者とは違うわ『終わり』が必要としている人間を呼び寄せてその身を取り込む。大抵『終わり』が欲している人間は自分が『終わり』に呼ばれていることがわかるみたい。まあそれが傍から見れば自殺となんら変わりない行為だとしても『終わり』にとってはどうで

もいことよね。リストムにエナの話聞いたかしら？美しく聡明なあの歌姫。そう『終わり』は歌が好きなのかもしれないわ 歌
至上の歌声を持つ人間が」

アジェルはそう一息に話した後いつもの艶やかな笑みを消し、それこそ気配まで消しているかのごとく押し黙った。

「あの人を知っているの？」

全てを理解することは出来ない話だったがとにかく、アジェルはフオーが一度も話したことのない育ての親の名を口にした。
懐かしいあの人の名。

「ええ、知っているわ。でも知っているのはエナね。大好きだったの。エナは本当に彼を愛していたわ。」

遠い昔を夢見るように瞳を細めアジェルは呟く。

「でも彼女は世界を選んだ。彼が幸せに生きてくれる事を願った。自分の命を『終わり』に差し出したの」

「何故そんなことを…アジェルが知っているの？」

震える拳を必死でなだめ、渴く唇で喘ぎながら尋ねる。

「わからないわ。でも知ってるの。信じられない？いいの別に信じてもらわなくても。だって私にはこれが真実だし証明なんて必要ないわ。そうね、でも大概男は「正しさ」とか「証明」とか「確実」が好きよね。フフフフ　すぐく愚かよ？だってそんなことになんの意味があるっていつの？大切なことはそういうことじゃないの」

大切なことはそういうことじゃないの

もう一度そう繰り返したまた押し黙る。

風がザワザワと音をたてる。

沈黙を際立てるように鈴が鳴る。

チリン　チリン　チリン

「自分はどうして生まれてきたのだろう」

少年が答えを求めるふうでもなく囁く

女は感情を込めずに、やはり返答か判断しかねる言葉を小さく呟く

「生きる為よ」

それはとても簡単なこと
それはとても単純なこと

叫びだしたくなる
感情のままにのたうってしまってもいい
溺れてしまうほど泣いて崩れてしまいたい

「今、このちっぽな世界はあなたの物よ。あなたが全てを決める。自分が贖にならずとも世界は在ると思うならこのまま逃げればいいし『終わり』でない場所で命を絶ち世界を道連れにするのもいい。どうなるかなんて誰にもわからない。きっと神様にだってわからない」

少女が身体をまるめて小さな寝息をたてている
白い肌が月光に晒され淡く輝いているようだ
幼さを残す輪郭、それを縁取る金色の長い髪
触れることすら躊躇
わせる少女という瞬間を生きている者

意味（後書き）

この辺はとばすべきだったかと思う。

神様にも聞こえない

ねえ フォー

もう一度あの歌を歌って？

お母さん昔歌ってくれたあの哀しい歌

ねえ フォー

お母さんは子守唄がわりに歌ってくれたから最後の歌詞をよく覚えていないけれど

私はいつも幸せな気持ちで眠りについていたらから哀しいだけの歌ではなかったはず

フォー もう一度歌って？

今なら思い出せそうな気がするの
あの歌の続きを

話声が途絶えた

少しして少年が朽ちた小屋へと戻ってくる。そっと足音を殺し少女

を起こさないように細心の注意を払っているのがわかる

少女は静かな寝息をたてている

夜は少し寒く、身体を丸め眠っている少女は
ひどく無防備でか弱く見えた

少年は少女の隣にしゃがみ
そっと、そおっと手を握る

小さな小さな手

瞬間

少女が微笑んだ

この世で一番の幸福を掴んだというように
瞳を閉じたまま眠りに落ちたまま

少年は微笑をうけて

泣きそうなほど

世界を忘れるほど

幸福だった

「
」

誰にも

神様にも

聞こえないほど小さく

少女にささやく

恐らくそれは生まれて死ぬ事に意味があるのなら
人が「命を懸けて解く謎」と呼ぶであろう感情の欠片

チリン

チリンチリン チリン

…チリン

神様にも聞こえない(後書き)

次話の関係上 短く投稿

おしまいのうた

微かな鳥の声で目を覚ました。

「フォー…?」

夜まで一緒に居たはずなのに…

「フォー…」

もう一度呼ぶ。

こたえはない。

そういえば世界が静かだ。

まだ朝も早いはずと窓を覗くがやはり薄明るい外は日が昇る前であるようだった。

「フォー」

三回目。

フォーは近くに居ない。

ふと 自分が手に何か握り込んでいる事に気付く。

リ：リン

静寂の中で鈴が鳴る。
フォーとつないでいた手に残された一個の鈴。

瞬間

リノは小屋を全速力で飛び出していた。

頭が真っ白になる

風を正面から受けて走っているのに瞬きすら忘れる
裸足に小石が刺さる 枝が頬を傷つける
狭い小道をぬけ神の山の頂上に

思考は停止し言葉は眠る

胸を過る絶望

心を壊す慟哭の衝動

…神様

神様 神様 神様 神様

…声が聞こえる

微かな、けれど絶対的な力をもった声

声は旋律を伴って響く

陽が昇り 空が広がり 海がささやき 風が渡り 神が在ることさえも許す

「フォーー!!」

瑠璃から藤へと色を変え陽光を浴び緋をとり込みはじめた空に
刹那さや儚さ弱さや絶望までも含みこまれた歌声は風が震えるよう
だった

声を辿りけわしい崖を無我夢中で這いあがると拓けた場所に出た

見知らぬ人間や村の重役達が白い服を着てある一点を見つめている
そんな異様な静寂の中でフォーーの声だけが響いている

嘘だ

夢だ幻だ馬鹿げた茶番だ

必死で嗚咽をこらえる

だめだ だめだだめだ

だって私はまだ幸福の意味すらあなたに教えていない

村人は陽の昇る一点に重なるフォーを見つめていた

白い服 風に舞う亜麻色の細い髪 手足の鈴

神の所有物である証

山に広がる少年である時期にしか出せない幻の歌声
そういえばいつだったか「ボーイソプラノは神様の悪戯」なのだ
と聞いた

一定の期間だけ素晴らしい声を与え突然その声を神は奪う

こんな状況にもかかわらず、リノは一瞬聞惚れた

この歌…

旋律はどこかあの子守唄に似ているが少し違う
しかし歌詞はリノがよく知っているものだった

よく

とてもよく知っている

祈り言葉

物心付いた時には暗唱できたあの詩 忌わしいほど魂の奥底に刻み込まれている

神を称え

神を敬い

神を崇め

神に感謝を捧げる

あの祈り言葉

その詩をフォーが歌うなんて

もしそれが強制であったならリノはその人間を躊躇いなく殺してしまっただろう

小さな身体が憎しみと怒りに支配されそうになる

きつく握り白くなった拳が小刻みに震える

あんなにも綺麗なあんなにも澄んだ声で

どうしてこの詩を謳えるの？

…なにが神だ

信じない 信じられるはずがない

神は私に微笑んではくれなかった

神は私を抱きしめてはくれなかった
神は私の名を呼んでくれなかった

そんな神様にフォーを

.....

そんな神様にフォーを?!

リノは前に足を進める

手を伸ばし あなたを掴む為に
この手がある事を証明する為に

おしまいのうた（後書き）

こころは走るゆつたにいつきに読んでもらいたい（笑）

愚かな子供

村の大人がリノに気付き驚きの声をあげる

しかし儀式は中断されることはなく、数人がかりでしっかりと押さえつけられてしまう

もがく、暴れる

どこに居たのか父親が慌てて寄ってきた

ひどく険しい表情でいつものリノであったなら完全に萎縮してしまっただろう

「愚かな子だ」

低く吐きすてるように呟く

そんな辛辣な言葉さえも今のリノには届かない

その間も旋律は途切れず

しかし間違いなくフォーは私に気付いている

何故ならフォーの眼差しを感じるから

リノは声も出せないくらい息も出来ないくらい泣いていたけれど瞳はしっかりと開いていたから

悲しい程綺麗なその旋律が鋭さを帯びてとどく
そして 静かに終わりを告げる

歌声が途切れ 静寂に包まれた祭壇にフォーが足をかける

あたりまえのように

なんの躊躇もなく

涙すら浮かべず

そしてふわりと、すべてを超越したように笑った

リノは息を飲む

「さよなら リノ」

祭壇からなにもない場所に進む

山の裂目 神へと続く道 死への扉

落ちるといふよりそれは吸い込まれるようだった

つま先から音もたてずに、恐怖の叫びすらあげずに

「フオオオオオオオ????!?!?!?!」

わからないわからないわからないわからないわからない
わかりたくなんてないわかりたくなんて

フォーは居たのに
つい、つい先刻まで姿があったのに
神への生贄だなんて

誰の為に？

アナタが幸せにならずして誰を幸せにするというの？
私は幸福の意味すら忘れてしまう
このままでは命の意味すら忘れてしまう

儀式のあっという間の終わりに村人は呆然としていた
リノはするりと父親の手を抜ける
白装束の人間も村人達も神憑ったように静かだ

リノは祭壇に真直ぐ向う
フォーが先刻までいた場所、温もりすらある気がする
ゆっくり足をかける 彼の行動をなぞるように

父親が我に返り何やら叫ぶ
でも もう何もかもが決まっていた

リノは手を伸ばす、体ごとフォーに届くように

そして音もたてず闇の中へ…

終わりの中へ

追いつくはずがないのだ

リノの身体の方が軽いしどう考えても時間がたち過ぎていた
無重力でない限り追いつくはずがないのだ

でも

同じ場所で最後の時を過ごせるならそれでいい気がした
心中なんて昔は馬鹿みたいだと思っていた

だって生まれてくる時も死ぬ時も人はいつだって一人だから

どんなに手をつないで同じ瞬間に死を迎えたとしても逝くのはいつ
だって一人だと

でも でもやっとわかった

そうじゃないのだ

たとえ最後に一人だとしても、傍に居たいのだ
身体ごと愛しさを感じていきたいのだ

ただそれだけ

…最後に自分の名を叫ぶ声が聞こえた

山の裂目は暗い

そしてどこまでもどこまでも続いているようだ

すぐに最後がくると思っていたのに　まだこの命は終わってくれない

でもフォーは満足だった

自分は幸せだった　そう思える事が嬉しかった

この命が短すぎたのかは今になってもわからないけれど不思議とすべて受け入れられる

最後に光を見ようと上を向く

明け方の光は神聖だと聞くから、もしかしたら旅立を祝してくれるかもしれない

辺りが暗いので自分がどれほどの速さで落ちているのかはわからないけれどわずか数秒であるう衝撃の時間はまだ訪れない

…瞬間をゆっくり感じるものなのだろう

見上げた頭上は闇だったがわずかな光がこぼれていた
なぜかその光はだんだんと輝きをますようですらある

黄金の光が闇の中を流れる

「……………え？」

初めはぼんやりと眺めていたフォーもその異変に気づく
だんだん暗い底に落ちていく自分に光りが近づいてくるはずがない

…奇妙しい

…何かが落ちてきた？

儀式では生贄以外に供え物を落とすような事はないはずだ
では…？

黄金色の光は少女へと姿を変える

伸ばされた手が

小さな身体が

「フォー」

自分の名を呼ぶ愛しい存在

泣きはらした瞳が少年の姿をみとめ　これ以上ない喜びを眼差しだ
けで語る

どうして追いついてこられたのか
どうして今手をとりあっているのか
二人にはわからない

ただただ 抱き合い暗闇に飲み込まれながら

フォーはリノの小さな頭をしつかりと抱いていた
無茶なのはどこまでも承知だ だが…

助けたかった

こんなところで彼女の命を散らしたくなかった

しかしこのままでは激突死は免れない 勢いを殺さなければ…

フォーは暗闇の中目をこらす
ごつごつとした岩肌がすぐ横に迫るが上手く身体を反らし避ける

死ぬ事しか考えていなかったからこの状況で生き延びる方法なんて
わからない
自分が下になりリノを庇ったとしても直に叩きつけられたのと衝撃
はたいして変わらないだろう

暗くてよくわからなかったがどこからか生えていたらしい

木の枝が頬を裂いた

…木が生えている

…こんな闇の中で

それはなぜか小さく希望のようなものを感じさせた

光合成を必要とする植物がこんな岩の裂け目で生きている

この恐ろしい闇の底がいつくるかはわからない

だから今足掻いてみよう

見苦しいくらい死に物狂いで

リノの身体を抱きかかえながら自分の背中を木にぶつける

枝のしなる衝撃

枝は折れないので背中には刺さらない　が

落下速度や二人分の体重が加わりかなりの圧がかかる

短い小枝や鋭い葉が背を傷つける

暗闇に必死で目を凝らし張り出した枝を探す

そして身体をぶつけ落下の勢いを殺す

間違っても少女を傷つけないようにきつく抱きしめる

幾度も幾度も

「フォー…?」

度重なる衝撃に驚いたのかリノがフォーの胸から顔をあげる

「大丈夫、心配しないで」

リノに、自分に、落ちつかせる為に言葉にする
岩の裂目に落ちて「大丈夫」もないのだが

でもフォーは生きる事を考えていた

谷底に落ちて 岩に叩きつけられるのを待つようなこの状況下で

生きようと

何があっても生きてやろうと

もう一度木にぶつかる

木は岩の裂目に所々はえており その場所から少し下の木までまた
落ちもう一度ぶつかる

落ちる途中迫出した岩にぶつかれば命はないが
しなる木の枝ならば衝撃を吸収してくれる
背中がひどく熱い、背骨が悲鳴をあげている

しかしフォーはぶつかる事を止めない

希望なんて甘い気持ちではなく
確信なんて力強い妄想もない

枝にぶつかる 跳ね返される 身体をよじりまた次の枝へ
背中が傷つく 熱を帯びる 衝撃で肺が苦しい

朦朧とする意識を必死で保ち腕に力をこめる
離してはいけないものが在ることの幸福を

頭上からとどく光が弱くなってきた
ほんの数十cm前しか視界が許さない

天地すらあやしくなる暗闇でフォーは見た
自分達が吸い込まれている闇の底の終わり

恐怖と本能で身体を小さく丸め
身動きが困難な落下中という状況下でもいち早く少女を自分
の身体の上にあげる

やりなおしはきかない

いつも それはどんな事だって

フォーはささやく

「神様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7274t/>

no name（未定）

2011年11月5日05時10分発行